

確子集

六

和書門			
九	〇	六	九
冊	架	函	號
一	二		

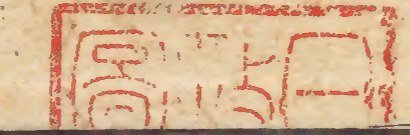
庫文閣内		和	
番號	和	9069	
冊數	12	(6)
函號	210		40



花洒家文庫

早も仙 星を留

増山井



早も仙といふとハ年中の夏祈
命は菊の早も命早もをす七返
つとある流し事よあつし
古家の世俗早も佛といふも
んたふる

おれ 能く

同

おれおれおれおれ事ハ元日おれハ
群臣の天子をおれさる事ハ
わ

七曜佛曆

同

七曜佛曆ハ日月火水木金土
の七曜を志るあるハつとあり
あり

氷様

同

氷様といふは氷室にたよめる
氷の厚さを度するにまじらざる
一々そなためとして石のりかめ
と氷をさしてまじらざる

院おれ

同

院のおれ一日院系の人て院の清
ふよそおれある事とくわ

祇園あり

同

祇園あつた名神事元三寅
の一天よ祇園のお願まは松の木
のきつりけよあこらかみなき
よそ大ざく難業のよめた用
事なり一話よ大晦日として
氷あり

門の神柳

同

門の神柳王家の書戸は柳を
くまて神をまじりよるは
土袋よ灯をとそあつる事
このあり

去年の生気のこの井を鑑て
あたるて人よくませり
其の日に氷河内裏よんま
れえお願まは先をまじり
中の邪気を除くといふ本文
と年中行事よ合よまじり
をつて井ひらくこと
のちめよくめまのちと云
又世積言よ云くわいし
日井華木とくまのちを

るり付まやと付り先立其の
るり在之家より年男といふもの
元日の早元昇のぬをくまを
こみぬとてよ水あをたぬるぬ
付りけぬどちまをぬい
其のるぬぬハヤ白にりて
糸を定付りこれ貞徳に
連歌よぬぬ元日といと能
不用し

つら餅

回

ニケ日につまこ餅を雑煮
も用るし

大福

回

元日は大福をさする茶を大
福といひるて用る事し

と福号

回

と福号福をまふりてり
号矢よしを射てうぐひ
原をいとむるこむり
けり号のま福びよ

と福号

回

と福号先まぎらうくに似
おるり

木さきり

回

木さきりなるよるぬを世
おいひあふさきり

いぬつむ

回

いぬつむいぬあふる正月の
寝起をいさるり

福号

回

左之部七日は福とくいとこながき
をいそひ作り

○ 神宮系 同

上の宮の日報告にまゐる事あり

○ 中御所系 同

上の宮の日報告のたまふことあり

○ 本御所系 同

○ 卯林 同

三月上旬の卯日色に木とを五

尺三寸つよきりて二束三束はゆ

ひておろわけよたつたつるを清

林といふこと事根縁よみ涼

氏御縁よみ卯つちとあり卯林

林と同一事の中中の魚鬼

を造り糸不より肉表よみまゐる

○ 相ありと云老院殿法流といまの
世子は若成より卯林といふ家な
とよ送れるハ一尺あまりの白くけ
つりうら木よひげのうらふをま
ひて保新御縁縁のこちよはく
れる相あり

○ 二宮大宮 同

二宮大宮二日し二宮と、東宮中

宮のほるししまつ二宮よま

つて拜礼ありて宮よはく事し

○ 朝觀新章 同

朝觀新章二日し是ハ天子の年

始り上皇并に母后の宮に於

ておろる事あり

○ 臨州密 同

臨州客二日し先ハ拵政関白家ノ
妻の始大后以下の上達部をまね
てあそびあふし年のあるし定
れる公勢もあふねをまね
の客と申也源氏物語ハいん
トまゝくとあり法持などあそ
びしむらうらうらと音楽を不用
して野曲の人も勿拍子あし
あといふ

○叙位 同

叙位五日或六日諸君のし勞を
奏し位を次第も叙す事
七日正月

同日正月いまの世ハり少を子口と
し其菜のあつものを園ひ侍り

○菜摘何法事 同

菜摘河神事正月七日若櫻入りの
明神あり

○古言院法修法 同

古言院法修法正月八日はもとより
七日をこある今ハ金剛界な
ねを明神ハ胎藏界兼くみかえ
るは修せらる後七日の法修法
トハ法事ト古言院ハ法中あり

○古言所法 同

古言所法正月七日
七日のねをおこなる師の字を
よまふ

○女王福を法事 同

女王福を法事正月七日
如王福を法事ハ日冬議解

史を以て義明門のうち帳のせめて
女里に福を流す事也女里福
の女の字よりまじらふ

平忌の御粥 正月 同

平忌の御粥十五日河内必平忌
此御粥よかゆをたすて年中
の田畠の古函をおまを流し

師子殿の御事 三月 同

師子殿の御事十六日伊勢必
山田もある事十四日十五日十六
日大い松をみあふ事あり

内宴 同

御事廿一日仁壽殿より新なる文
書を流し詩を流す御事あり
流す事あり

外記の改始 同

春日をえく外記の恒例修村の
改をこりたことなる事あり
あまづ春日の改を行はるる

御事 二月 同

御事廿五日法徳上人の忌月あり
十九日より廿七日御事院より
法事あり

御事解く事あり 同

春日の解く事あり二月一日諸人へ
たりあり

御事 二月 同

遺せぬ御佛御薬を入流んとて
此御事を流す事あり世流御事
あり十九日より廿五日御事院
あり

如堂より中経を訓讀し釈迦の
名号を唱ふるに從物より中
の釈迦念仏といふことぬしめ臨上
人よりめらるると云々

積塔二〇二日 同

積塔中六日或石塔とかり中経
の法事あり

きすすくを 同

きすすくを 貞徳云其ハ晋より
経のなくわをきくを記未明に
ゆきしころをとり物よりゆき
しものも解さかりたり

出筆 同

ゆきしき筆つちを又出の筆

解合 同

解合を先師貞徳云三月三日ある
有まよまよといふ法あり怪ある若
く云ふもあはれ京音ハいつとする
と申あはれを難ししてまよきた
といふ但唐の明皇法明等より
関勢をふあはれ位よりまよひて
も治勢坊をかきく者千五百人
をまよきを領りせぬる事
文勢聚り出ると世語にまよる
りし是を解ありしは飯もやと
ゆふ本朝ハ赤雀院の天竺ぶ
元年三月四日は厨籠十番あり
し由或記まよるより先師
も難と怪まよるはれ傳ふぬ
ハ本をまよるといふなり

ひのふ

同

ひのふあそびひのふはなをふふふふふ
びんちまきそてい雑あるし源氏
物語ひのふのふのふのふのふ
ひのふのふのふのふのふのふ
らぬまふふふふふふふふふ
しらのふのふのふのふのふのふ
りふのふのふのふのふのふのふ
ふのふのふのふのふのふのふ

薬師寺の家勝会

三月 同

薬師寺の家勝会七日はち天
武天皇の御祭と云毎毎七日日
うれ揚王行を七海さふれける也
石清の臨時のふふ 同
石清の臨時のふふ 同

御ふき先中辰日試樂あり
舞人竹茎のふふふ竹枝を
ふふふにさ仁壽殿の下り
はふふふふふふふふふふ
くお子^{モトメ}うふふふふふふふ
するとふふふふふふふふふ
のふを便ふ人の冠まき三秋
五秋の後まねがうけのふあり
是ハ平の御門の礼を退治のふを
ハ橋宮の御門のふのふのふのふ
の御養のふのふのふのふのふ
るふふふ

礼お講

三月

同

礼お講十二三日敷山ハまの御殿
まおいて行ふ

勸学会

三月

同

勸学会十五日康保年中より大内
記及、保胤相言、縁語のつとを
わろふさんと云ふ及、先達の学
徒を以て三月九日の十五日に
おこあひをいれ、侍り、勸学
院ハ三條の~~心~~心王生の御いしの宿
の者、平治に為、平氏の御学、生
指まなびしてあり、~~心~~心ありと
世より四條大宮の御よりし。

清新供

同

清新供三月廿日弘法大師入定
の日なれを、来ちに法をあり、~~心~~
有りし。

有りし。自徳云三月の末、満を

古業は、有りし。ね、有りし。

有りし。

有りし。

同

有りし。や、自徳云、有、船の、
有りし。

有りし。

同

有りし。有りし。有りし。有りし。

有りし。

同

有りし。有りし。有りし。有りし。
有りし。有りし。有りし。有りし。
有りし。有りし。有りし。有りし。
有りし。有りし。有りし。有りし。

山吹

同

有りし。有りし。有りし。有りし。

をいふといふと和名は山崎と云
別名は公任の山崎と云は
我が朝の只あまふ紀の事

山崎

同

山崎祭四月上旬日河内へ午日初
使あり杜平山崎近邊一人の使
為社より

山崎

同

山崎祭四月初日山崎は社大和
よりあり山崎の大忌祭山崎の風祭
は風祭の難を除き去る年の祈
りあり

山崎

同

山崎祭四月三日或は三月
あり

山崎

同

山崎祭四月八日天王祭の事
あり

山崎

同

山崎祭四月中甲日山王祭也
大宮祭三宮二宮八王子宮人十
師三宮以上七社の神楽船三唐
崎より法供なる也

山崎

同

山崎祭是率川祭を云と云三枝
の花を酒樽よかする祭と云は
祇令に友の祭の事と云は

山崎

同

山崎祭四月中酉祭冷泉院又
おをせたる石神あり

吉田家

同

吉田家四月中子日吉田の妻此
華也中納言山蔭に建てるなり

千園子

同

千園子四月十六日三井家の鬼子母
神も童のまゝ也とてこしをさ

暖職家

同

暖職家四月中、亥初^{ウツ}岩のまゝなり
とくわ

尚麻竹り供養

同

尚麻の法事、四月十四日中納言の
忌日をり初り供養といふ也

花供

同

花供四月廿二日高僧大師の法衣
を衣給ふ

杜のり

同

杜のりあるよをなり、いれをい

美人学

同

美人学後てあり、か子のをのち
いせ記をる云り、是な、又眉作

を、い、り、是、美、く、そ、作、者、よ
官、可、定、季、但、師、後、ハ、な、し

供子瓜

同

内膳司供子瓜山城の法園よりたき
まらるを供ふと

端午

同

端午の節、端午も、端午といふ
めの五日といふん、五月八年の月、

より、端午といふ、是も、め、の
も、ま、と、い、ふ、心、く

○ 廿四日

同

季吟集又は茶玉をむね^{あめ}め
とよめる奇も侍り是もりも芳蔭
を用るは^{あめ}本一^{あめ}ま本よ^{あめ}い^{あめ}を
つものむとも^{あめ}あり

○ 芳蔭湯

同

五月五日は國をこころしてゆある
はる事一犬戴礼もあり是^{あめ}い^{あめ}まの
世の芳蔭の湯のをこころ^{あめ}ま^{あめ}り
た^{あめ}史の^{あめ}ま^{あめ}い^{あめ}ま^{あめ}い

同

右との多指のま^{あめ}い^{あめ}つ^{あめ}い^{あめ}い^{あめ}六^{あめ}日^{あめ}は
は^{あめ}い^{あめ}を^{あめ}り^{あめ}の^{あめ}日^{あめ}と^{あめ}い^{あめ}り^{あめ}五月三日は左
とのあ^{あめ}り^{あめ}つ^{あめ}い^{あめ}四^{あめ}日^{あめ}は右とのま^{あめ}い^{あめ}ま^{あめ}い^{あめ}六^{あめ}日^{あめ}
中^{あめ}あ^{あめ}い^{あめ}五^{あめ}日^{あめ}は左^{あめ}との^{あめ}ま^{あめ}い^{あめ}ま^{あめ}い^{あめ}六^{あめ}日^{あめ}
は右とのま^{あめ}い^{あめ}つ^{あめ}い^{あめ}六^{あめ}日^{あめ}を^{あめ}ま^{あめ}い

後身福の尻を引おれ着る^{あめ}あ^{あめ}ま
ひを^{あめ}り^{あめ}の^{あめ}日^{あめ}と^{あめ}い^{あめ}り^{あめ}萬^{あめ}日^{あめ}ま^{あめ}い^{あめ}ひ^{あめ}も
お^{あめ}る^{あめ}ま^{あめ}指^{あめ}を^{あめ}り^{あめ}ま^{あめ}い^{あめ}ま^{あめ}い^{あめ}ひ^{あめ}を^{あめ}ま^{あめ}い^{あめ}ひ^{あめ}
先をひを^{あめ}り^{あめ}い^{あめ}ひ^{あめ}い^{あめ}ひ^{あめ}

○ 標のおひもの

同

五月五日俗人標^{あめ}ま^{あめ}を^{あめ}り^{あめ}て^{あめ}お^{あめ}ひ^{あめ}
ものとしそ^{あめ}悪^{あめ}氣^{あめ}を^{あめ}さ^{あめ}く^{あめ}る^{あめ}事^{あめ}一^{あめ}從^{あめ}
新^{あめ}布^{あめ}巾^{あめ}は^{あめ}あり^{あめ}と^{あめ}捨^{あめ}芥^{あめ}抄^{あめ}よ^{あめ}り^{あめ}
枕^{あめ}双^{あめ}邊^{あめ}り^{あめ}も^{あめ}標^{あめ}の^{あめ}事^{あめ}を^{あめ}り^{あめ}ま^{あめ}必^{あめ}
五月五日は^{あめ}あ^{あめ}ま^{あめ}を^{あめ}り^{あめ}ま^{あめ}い^{あめ}り^{あめ}
今^{あめ}も^{あめ}く^{あめ}田^{あめ}舎^{あめ}よ^{あめ}ハ^{あめ}瑞^{あめ}年^{あめ}に^{あめ}標^{あめ}ま^{あめ}を^{あめ}
を^{あめ}新^{あめ}よ^{あめ}ふ^{あめ}く^{あめ}取^{あめ}侍^{あめ}り^{あめ}い^{あめ}ま^{あめ}せん
づ^{あめ}ん^{あめ}の^{あめ}木^{あめ}と^{あめ}い^{あめ}ま^{あめ}の^{あめ}い^{あめ}

○ 宇治茶

同

宇治茶五月八日まんがりといふ

半をいひきやして海をい

今宮家 同

今宮家五月九日今宮十五日紫
姫ありけり松とておれおびし

有無日 同

有無の日五月廿五日貞徳云村上天

皇の法國忌はあ忌とい天子の

沙忌月をい右月也はる大肉を

事い又急利あれを行る事

もあまたよりてはる名あり

宿膳講 同

宿膳講つれく事よまは講の戸とい

るあまたこの事い事申行事

事今よ五月の事いしよあまこれ

あり

虎うる 同

虎うるの五月廿六日は日我ゆ

うこれうる色そ書の虎は為愁傷

せうあまより隠れさうく云い

蕙 同

蕙花蘭よ似てはまこ白あり

はらり花 同

はらり花貞徳云はらり花をいつい

うそふとい事いあうかといひ

の事いれえなるとる也

氷る玉 同

貞徳云氷言の氷は四月一日より九月

尽すはあまはあまは六月一日を

肝薬と用るなりはあまはあまは

事い今案に四月より秋はあまは

延喜式主水式よみしり熱月を
いふ時にも氷を引るをいひの抄に
といふに源氏常夏巻にも氷の巻
半作りよ載集よ氷室山より梅を
よまるともあり又氷室の巻
も夏にこの頃の世に氷解を氷
よまるとして親日よ引の作り

祇園会

河

祇園会六月七日高融陰天延喜
六月六日卯心といふ時
河院に流すありさるのふり
香をのりありさるのふり
秀吉公の時いすの四空亭極の御旅
あよとすあり

長刀花こ

函谷心こ

延喜再君古事
也かへることいひ

月形こ霧降

人形棚は延喜あり

菊の降

延喜と云ハ非ハ菊酒融人形ハ
延喜再君古事

菊酒こ

也 延下降 形あり

舟形こ

神功皇后は破良干珠浦珠を
延喜再君古事

岩戸山

日本紀神代の巻のあり
延喜再君古事

白出山

神功皇后三韓を
延喜再君古事

孟字山

女田子の重中
延喜再君古事

郭巨山

同登掘山あり
延喜再君古事

琴破山

延喜の載達破琴あり
延喜再君古事

蟠螂山

立車よむあり
延喜再君古事

白樂天山

師祭の
延喜再君古事

方子山

延喜再君古事
延喜再君古事

観音の像

延喜再君古事
延喜再君古事

木賊川山れくさく川の原山の木の旨よりみく 秋の夜月とよめる詩の

破やぶ 若川山大和物語に若くしてあり 名盗人山出づる

十四山同 山伏山 天神山 笠笠山

十四日山 七日は法孫一に出流し神楽

橋本彦山経記 經山飛門の三傳は經

黒目古今序より子の後に居るあること 後行者大藏後のうさそくより角鬼神を

冷麻山出づる詩に 舟七日の舟なること

唐山唐の都のていじ橋かひる人形おれ 観音山 舟おの

津崎山 同

津崎山 同

津崎山 同

津崎山 同

津崎山 同

津崎山 同

津崎山 同

津崎山 同

津崎山 同

津崎山 同

かまへて井をたふる事と云へ

法火知事

同

法火知事六月三十日ト新氏の火
を打て宮城の四の角より御守
あり火災をふせうんためと也

簿子

同

たうむろいたけをしをぬる甚し

重の火事

同

重の火事貞徳云六月三日の甘み

重の火事二重は二重のやうな事を

いふあり

けしし井

同

けしし井六月井をさへり

さうやと

同

こつと今こつと云へりやと

庭前は駒山のふたつ修をを或は

東山の甚よ新しむか大程と云へ

先づは流もあつて云へ予も若白

あつたにひけりしけりし後

職人者新合ふあつたの事

う心てつとよめり判の初は先ん

どとを夢ありくおの初なる

まこめ後まは心やと云へ

こころと云へ又と云へ

まらまらひつと云へ

先惟悔まらまらまら

神ひまら

同

神ひまら云へ

るまら

夜虫

同

夏虫牙をこがくとよむの蛾之火より
虫と云も物なる事なり

持待 同

持待 葉をかりし母の人のまじ
むる事七月あまする月を
いせふげ也

六乃系 同

六乃系 七月九日建仁寺の南
まあり昔昔は道にかよひあつ
所をぬぐうを道途のみちと云
聖と云むは都人まじりて
つらき事なり

持買 同

持買 六乃にまじりて買む
まじりてまじりて買む
買む

廿身玉 同

廿身玉 父母もまじりて生身玉と
いそひけり又たまじりて蓮の飯
をまじりてまじりてまじりて
まじりて

ハ幡安所 同

ハ幡安所 七月十五日今十三
月十五日

ハ幡安所 同

ハ幡安所 貞徳云水影字ハ多
クマヤヨメハハ幡安所の事なり
又或はハ幡安所の事ハハ幡安
むくもハ幡安

ハ幡安所 同

ハ幡安所 貞徳云廿七ハ幡
安

山うもは母の事なるを作ると
はと本田あり

穂屋作 同

穂屋作貞徳云為のあま作る
かりをありいづらもはくも也

杉樸 同

季吟楽子相撲の秋なる事ハ
七月のあるやけ事けぬ
海一との世のいしりすまをハ
付れとうちまうせいのけをまを
としてよまてはよわく

稲妻 同

稲妻いぬめとの

あま海 同

あま海海蘭の一名又花はま

咲て細きをあつ先別く

萩 同

貞徳云いせの濱萩の草の

あけの雑花をもよひつ秋く

あんどちのさ 同

あんどちのさおとい一草のあま

をいあつに似ていあつさ

白

茶師子 同

茶師子あま

あまのさ 同

あまのさあまあまあま

色白銀音子と似てあま

あまのさあま 同

あまのさあま貞徳云あまの

中よを履くこのころをいふに
昔はは九子 同

八月十六日五条坊の町の
ありて紅梅庵といふ是これ天孫
の降る所也

秋田原 同

秋田原 同
秋の色を染せ
造化の汁に

蒲葎 同

蒲葎 同

こゝろ 同

こゝろ 同
汚指板

江籠 同

江籠 同
江籠或人江の蛙といひて秋の季
ことしは是 江籠を書かぬ

るをきて又得ぬと

野分 同

野分 同
野分は八月の吹大風

秋夜 同

秋夜 同
秋夜は八月の大風のしるす世

秋夜 同

秋夜 同
秋夜は八月の大風のしるす世

秋夜 同
秋夜は八月の大風のしるす世

秋夜 同
秋夜は八月の大風のしるす世

秋夜 同

秋夜 同

秋夜 同
秋夜は八月の大風のしるす世

秋夜 同
秋夜は八月の大風のしるす世

秋夜 同
秋夜は八月の大風のしるす世

秋夜 同
秋夜は八月の大風のしるす世

秋夜は八月の大風のしるす世
秋夜は八月の大風のしるす世
秋夜は八月の大風のしるす世

○

志らぬれつるハ別の扱あり先々母
石川~~山~~丈山老人門下よりそらづを
作りて平文字平紙本を小煙堂
をもち平に宮へあつる予師匠
も何れ若侍一平ありくの正し
夕暮涌る金新会 同
泉涌る金新会八月廿世する
入滅志あり舟忌^{ツキ}後鬼^キ牙^キ齒^キを
取てよけりりらるるに幸甚天運
て丸く一けるに今新ありと云
つらく一りらるるに今新ありと云
りて海らみ木がきせ侍り

○

生玉
生玉九月廿日大坂福前

例幣
同

○

例幣九月十日伊勢若神宮(法
幣をもちせ流る毎日の事
によりて例幣といやし
任者の市 同
任者の市九月十日室の市云
これに神饗をもちつれ神宮供
ちり神饗をもちつぐる作法
あり神饗をもち倚子をもち
つ法事ある侍り此神を
男ももちも侍り

○

波利女祭 同
波利女祭九月廿日高辻室町の
まありむく一十七日廿日中
より九月とせり先には社僧養
白の予子問云此神新命天女

こねをちんぢよといふ。又生社
のいされも 見うるありあり
いでり 平幸と宇治移遺もて
取見ぬられの毒つけてはけり
侍 ちむ 出その前月ある人の
むまの生あまのこをけりけるに
薪りたさめんとく 多部山は
ゆきりぬハ平死もとのあよりて
のちハ更ま初ましくぬらん世ん
くこあくてこのあま物さめ侍
早午の塚のふとり 六七回くあて人
もえん住つうで 蒸地もてあけり
後子何人やらん社をこつる
侍り 午の社あみそ 毎々女子祝
侍 今粟安齋 齋修弁や乙

如を沙福神社の王の弟三女
つとより又牛取天女 沙福神社
王の三女をのとりあつり 午の社を
婆利女といふ 萬葉集よま
くれこれをあまの弁や天女を婆利
女といふ 彼町ハ 舞臺計女
又秀吉大坂社を 東山佐田牛
のハ 橋宮の傍よりつりあつり 橋
斎 臨みえもとのあま 安置をさ
すれと程の佐田牛よも 午の社
ハ 計女とわたり 舞臺計女
正字よあまの 婆利女といふ
づきををこぞよとあまの
つとよりあまの 舞臺計女
又平計女といふ

久字をかけるま

○旅夷集

同

旅夷集九月廿日建仁寺の書あり建仁寺の書あり洋申より難風ありて舟已よ危りしは波よつれは夷を舟中よほり是我が船の蠅子油神の書やき神の波の難なるは難と舟をりてよりこそありは波よ難なく物ありて生平よ安んぢるよよまは波の難人波の難なきれをき

○此情集の歌

同

此情集の歌九月廿日作花

○権

同

権権集河川百首も権宗冬の是も出あり平能ゆわ冬といふ一難あり志うねも貞徳は是つきて権ハ季をもつて権集も利といひり権方論しう〜権貞徳云字集のそと也権もる也〜平のさだ権一平庭あとの文字を入る也わねるかう同わねるかう同あり

○煖炉集

同

煖炉集は九月廿日に十月一

日下有司煖炉炭を運ぶ民百
其酒をくまうらして煖炉会を
あはれと名華流すあり

法新儀 同

法新儀十月十三日蓮上人忌
日あり

夷儀 同

夷儀十月廿日商家は祓之

夷儀 同

夷儀山玉をくまうらして大馬路に家
換ふくまうらさし

夷儀 同

夷儀何尺ふらと半り見ら
ものあり

夷儀 同

字儀あり

同

字儀祭十月上旬日儀祭の
胸形社のあし氏人先を行ふ

とくは津川天恩社とそまの
おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

おのふくまうらさし

もあつるを云也廿年十一月廿二日
事しめりては祥瑞あるに由りて
平目ハ天子南殿に出所ありて
旬をこもりせ流ひるに如る表を
せしむる事なきとあり

物の子

同

物の子は先ハ五節の示流りて
次に文部卿の権多岐をあらはし
のありしをかりのつらむと申し
子あり

子あり

同

子あり子日大萬夷の法ありて
二二まゝ大根なりと傳へたり

大師傳

同

大師傳十一月廿四日是天台智者
大師の忌日也妙法蓮華經を

終して玄義文句摩訶止観を
作りぬり台家を立ちぬりハ
報恩の儀をおこなふに傳へる在家
家もあづかるの儀なりとたむけ
たり

云智天智のほ國忌

同

十二月三日崇福寺より木におはる

栴梨御盃

同

栴梨御盃はまうやりの庄のまき
をよそまうりて殿上より奉り
これハ仙名に付あり

和布刈の御事

同

和布刈の御事十二月廿日のため
廿の別は神女はあまのまきめを
りてこれハ元白子神女とそを傳へり

園見

同

園見せしむる志は乃の夢の如く
園ののろひて葉をさらす海舟
てをるくに我家をまねのあらる
手もてしむる志の如く
衣をさらり
衣をさらりす言の料は衣を
つくしむる志は乃の夢の如く
あり

園見

同

園見せしむる志は乃の夢の如く
園ののろひて葉をさらす海舟
てをるくに我家をまねのあらる
手もてしむる志の如く

園見

園見集

園見せしむる志は乃の夢の如く
園ののろひて葉をさらす海舟
てをるくに我家をまねのあらる
手もてしむる志の如く

園見

同

いさむる志は乃の夢の如く
園ののろひて葉をさらす海舟
てをるくに我家をまねのあらる
手もてしむる志の如く

いさむる

同

いさむる志は乃の夢の如く
園ののろひて葉をさらす海舟
てをるくに我家をまねのあらる
手もてしむる志の如く

いさむる

同

いさむる志は乃の夢の如く
園ののろひて葉をさらす海舟
てをるくに我家をまねのあらる
手もてしむる志の如く

いさむる

同

いさむる志は乃の夢の如く
園ののろひて葉をさらす海舟
てをるくに我家をまねのあらる
手もてしむる志の如く

いさむる

同

いさむる志は乃の夢の如く
園ののろひて葉をさらす海舟
てをるくに我家をまねのあらる
手もてしむる志の如く

いさむる

同

いさむる志は乃の夢の如く
園ののろひて葉をさらす海舟
てをるくに我家をまねのあらる
手もてしむる志の如く

○ 燭映

回

をとりて燭を糸を縛りて
也（おのり）

○ 芝の珍

回

花のすゝ葉は珍を付くを
長ずるを（おのり）

○ さいころ

回

さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）

○ さいころ

回

さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）

○ さいころ

回

さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）

○ さいころ

回

さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）

○ さいころ

回

さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）

○ さいころ

回

さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）

○ さいころ

回

さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）

○ さいころ

回

さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）
さいころをふるを（おのり）

を祈也

麦

曰

とろ字 ちんちん

あて

曰

とろ字 ちんちん

まじ

曰

ちんちん ちんちん

麻

曰

ぬき字 麻のる

鴨

曰

鴨を云ふ

を云ふ

曰

を云ふ 儼一字を云ふ

やうと 儼也 字は 儼

とよむ 儼 諸部 行る也

藤も 藤也

曰

われ 藤も 藤も 藤也

えん の こ

あを 櫻

曰

あを 櫻 字は 櫻

を云ふ 又うは 櫻也

あを 櫻

曰

とろ字 ちんちん

桂の 木

曰

あを 桂の 木

鴨の 子

曰

とろ字 鴨の子

鷹

曰

とろ字 鷹なり

梅

曰

鳥をくち梅あり鳥をり子
とらいつか

燈 同

川ききすくそりなり

卯也 同

くさる子介ををさる也

柳 同

うさく子柳のきぬ

牡丹 同

よろもそ牡丹の西

あり 同

よらるるをさるこく田を

と書い

鷹の山別 同

鷹の山別七日二十五日

ををある一鷹也

筆 同

うらむら初涼のよみ夜

大ぬあらし也夜分こ

あまの書 同

む苗く書くちの葉のち

たると云く書目じ

本家を 同

たくとをけらはる

十日 同

あこもつ月 十一日

日のち 同

月のと志ほ月出ちあふ

さよあふ

芒 同

つゆそ子属をこゝ家也字と
書あり

ゆまち月 同

ゆま月 同

ゆま月 同

ゆま月 同

ゆま月 同

ゆま月 同

ゆま月 同

ゆま月 同

ゆま月 同

ゆま月 同

おむとちり女郎の色の白
字に男女郎と云

鳥 同

おむとちり女郎の色の白
字に男女郎と云

鳥 同

おむとちり女郎の色の白
字に男女郎と云

鳥 同

おむとちり女郎の色の白
字に男女郎と云

鳥 同

おむとちり女郎の色の白
字に男女郎と云

鳥 同

おむとちり女郎の色の白
字に男女郎と云

鳥 同

二葉の心葉いささうらひいあつは
おあ

四月 同

このをその月四日あり

こころは云 同

こころは云の七夕は六月もえ

夕かふのちをさうりよさて

音の取は云ひいふ取あ

仙翁を 同

紅梅をせんわうけし

古あ 同

あはれあひし五月六日と欲

なう

三枝を 同

さうらふお三枝の花おて

通磁あをわいふる也

さうらふ 同

さうらふ六日井井本をさ

らゆるるさう

桜う 同

さうらふり桜をよる也

桜あき 同

さうらふあきもあけ葉をさ

なまこ

さうらふ男 同

さうらふ男月の右をさ

茶を 同

五月のむくはむのる也

後 同

さうらふの葉を也けのかた

耳も云也

芦

同

芦、れき子、若あり

まきこひり

同

まきこひり、五月、中、に、取、り

る、あり

顔、る

同

こゝろ、る、うゝ、あり、也

糸、束

同

糸、束、せ、る、糸、束、を、云、水、瀬、鳥

麦

同

み、も、も、ま、む、む、あり

か、ま、る、糸、束

同

糸、束、れ、清、く、し、と、書、法、形、も

書、也、か、ま、る、糸、束、大、の、糸、束、清、く、延、日、也

七、の、日、也

蓮

同

み、つ、の、糸、束、蓮、の、日、也

楳

同

う、ま、い、子、桃、の、果、実、あり

志、あ、る、あり

同

~~精~~、糸、束、志、あ、る、あり、精、の、糸、束、あり

玉、娘

同

志、く、玉、娘、を、云、白、玉、娘、と

書、あり

甘、る

同

志、り、こ、る、甘、る、志、度、る、あり

茅

同

志、あ、る、子、の、糸、束、の、日、也

茅

同

志ろこ子らむなましむらあや
めらこせ

ひをむ 同

ひをむ 世のうま
夕も死する虫あり

ひゆりの日 同

ひゆりの日五月五日世に
近うちを引おるるこ

ひらち第一 同

ひらち第一麻姑神は
初め初め第一

核校 同

ひとく子孫をうまう
三月七日 同

くの日三月七日

桜 同

もくろ子桜あり

粽 同

もくろひ子ちまをう

まこ縄 同

まこ縄 物まをう

麻を長し出ま

まらる 同

まらる 麻の習を云

袴 同

まのねる 袴あり

菘 同

まけのねる 菘の習を云

蓬 立南言葉考

いけまな蓬

大角豆

同

いさくさ 以前学 大角豆の一名

まめまがり

同

いさくさ 班鳩 まめまがり ともなかり

石枕

同

いさくさ ふ 七夕あぶらの枕

鳩吹

同

いさくさ く 鳩のちまねを

いさくさ 人 のなをよぶ又鳩

のちまねをよぶ て 麻をう

をよぶ

けしき

同

いさくさ 著鷹 あくたうをよぶ

村古き 著 をよぶ て 合し 胃

いさくさ 月 廿八日

ちんじん

同

いさくさ 花 藤 穂 よ いて る

まじり

あめい

同

いさくさ 蓮 のちまね 根

いさくさ

同

いさくさ 果 鳥 ち まね あり

瓜

同

いさくさ 瓜 のちまね

いさくさ

同

いさくさ 照 燎 油 朱の夜 燈 焼

あり

いさくさ

同

いさくさ 見 羊 ち 新 あり

梅

同

あまのうさぎ 白羊 梅あり

紅葉 河

錦字 紅葉あり

麻 河

あしきなる 麻を云く

あまのうさぎ 河

あまのうさぎ 正月 月中 卯 新嘗合

神もお徳をたまふあり

芭蕉 河

あまのうさぎ 庭忌平 芭蕉

火串 河

あまのうさぎ 火串 庭忌平 せんしと

あまのうさぎ あり

あまのうさぎ 河

あまのうさぎ 鳥葉 庭忌平 のるをけする

紫あり 新新 庭忌平 あり

このあまのうさぎ 河

このあまのうさぎ 宿直申 戌の刻あり

子 庭忌平 庭忌平 よりおまを

右 庭忌平

牡丹 河

あまのうさぎ 牡丹あり

あまのうさぎ 河

あまのうさぎ あり

松 河

あまのうさぎ 庭忌平 庭忌平 より

松あり

あまのうさぎ 河

あまのうさぎ 庭忌平 庭忌平 より

あゝなるを擇ど船よりなるを
をもち一日ハヤ一方のなるを
そつていふこ

女房の茶 同

をんふ茶 女房茶

ぬるる 同

くふる 雑男

高 同

うまき 鶉あり

かふふる 同

かふふる びよしのなる

二葉 同

~~茶~~ 茶のなる

茶の山別 同

茶の山別 七月廿五日の茶を

をふる

角紐茶 同

はのいぬ 若の茶出さか

ちぢり

芥 同

つまき 茶の茶

わいびり 同

福のいり 茶

茶 同

福のいり 茶

いり

わいびり 茶

同 同

國史 四月申本茶六二兩加茶

松尾より茶をなる

柳 同

蕨

同

山根くさし蕨あり

やまうしめ

同

やまうしめあまるの尾を切て焼て木
よてうまうして田よ立ねわ麻のよ
ぬあり

風

同

こいしし 魁 木枯 風

菊

同

こいのえきふ菊あり

仙翁を

同

こいしめいそ 仙翁あり

牡丹

同

こいしめいそ 牡丹あり

秋の宮

同

秋の宮 秋の宮を中宮とす

秋の宮とあり

桜

同

桜戸さくらの宮の戸あり

桜

同

桜がりさきをさうあるんあり

四

同

けららをとる 四十九の宮

夕月日

同

ゆふづらひ 夕陽日

芒

同

まぶらき子孫あり

雛

同

みゆきなる 湯草鳥 雛あり

鶺鴒

同

こつていこ 鶺鴒 あかぢの雄雄
常子別居し

この日 福 同

この日のちりく 巳日 板 安康

天皇始子三月上巳東流のみ

よめし板し酒宴あり

あむまや 同

こつむまやそちりあむ

あむまや

板 同

あむまや 清士忍子 板あり

こつむま 同

水掛子りそそ板あり

あむま 同

こつむま 世あり

あむま 同

あむま あり

あむま 同

あむま あり

あむま あり

あむま 同

あむま あり

あむま 同

あむま あり

あむま 同

あむま あり

あむま 同

あむま あり

あむま あり

あむま あり

あむま あり

二重周

同

ひとも周 六月よりあし酒を造りて帝よそましく

る合

同

ひりまるる合あり

躑躅

同

獨子躑躅あり

色名

詠諧無言抄

色名秋あり 色名の色あり 秋

山中より金りて秋又其なり

色名の色

同

花の香 色名雲と名まも雲

色とらんまし 句体よよる

摺紙

同

摺紙あり 詠あり 先ハ

禰師の麻を禰より知一志

まして人のと御まをそめん

ためまも御合し口よあて

摺の手ねをまらなり おあなり

あや作

同

あや作 新あり 信濃のは

皇降防のるこ 七月廿日より

せ七のまえ 蔭のありそりなり

をうくうしてあふこもあふ精

逢するし 年中七十余年の

祭ありえ 師防皇兄依山皇

あて云てハ 難あり 又上 彫 剛

又山世の笠取山も 勅はあし

いつくまてハ 兄佐山と云し

仙名

同

佛名十二月十九日より廿一日まで
内裏より出家ありて佛名
經をよみぬひて三世諸仏の
ほ名をととめて、國中はくじ
はく我減一あり

照射

同

照射なる火をととて麻子
をふるるし神をいふとも云じ

杜より

同

杜よりむし、其の季よをせし
な、の季物さるる事ゆへ今ハ
な、の詔よ入じ

そうつ

同

そうつ、是ハ玄奘僧都の傳
中、^キ者傳の中山よりみぬる村

た、く、出、ぬ、り、あり

松の葉

同

松の葉、其あり、亦よハ百年よ
咲やうよ云じ十代とも云り、花
とも、毎年緑のものと、白く咲く

小倉の物

同

小倉の物、物、物、物、云々あり

あ、う、り

同

縁取、正月十日、卯友の除目あり
縁ハ田舎、小除目と云、亦、と
礼儀を、あ、う、り、して、又、大除目、
當日は、出、る、じ

踏、交

同

雲、取、走、り、ま、ま、踏、交、の、言、念、と、云
天武天皇の御宇より始るなり

正月十四の男たつ十六の女
踏分あり女御宮をめぐりて
催す楽哉うさむらあり
むう 正月十四の夜年越の
余波を惜みて洛中を遊子の
めぐりて月をまかりてうさむら
るより始也

桜鯛 同

桜鯛木葉鯛と云ふある。拙に
桜の尻尾をみる

桜貝 同

桜貝の壳よはさるれ貝と云
ふ貝

大桜 同

大桜は冬咲くとも云流みごと山桜

女似く葉大も老木よ牛車つゞきは
つゞき

志まき 同

志まき甘藷と用し同村ある。拙に
志まきハハ志まきと云ふはこれ

美人草 大金花

美人草けのちいさ花を云流
る又白あまを云ふはこれ

かんこ 同

かんこ 野公のめんを云流
ぬけを

五月のねのぬけるあり

箒 同

葦竹よあまのきりぎりす
ためのけりて

○ 録 曰

かたう石もちと云うそと似し
うをあり

○ 夜真 曰

夜真ひく夜をきつぬ
りしものを

○ 歌 曰

けしおすそと又きりす
云ふあり 炭をいへるあり
やくを

○ 鴨 曰

鴨あちの村をくろ鴨のかもの
名うるをあり

○ 祇園寺 祇園寺靈會細記

山博國電岩郡八坂郷祇園社感

神院と早を記す牛頭天王

と名する王博を守護

○ 折言ひありて貞観十一年

天皇 天和 仁孝の末に

この天子厚く言ふ宗

元年六月十四日

会を行つる

に始りてより

を考ふた七日

十四日を

長口

正面に

天井幕

上水引

△長口二条小坂の邊に長口をたせしに
長口二条小坂の邊に長口をたせしに
長口二条小坂の邊に長口をたせしに
長口二条小坂の邊に長口をたせしに

紅地 蜀江 下水引 握て緋唐鏡 二番 緋色地唐鏡を合して

三枚の 前纏 阿茶陀古 見送 花をり金の 花を下り就

緋頭 小瓶法 人形 緋力をたし指右より身を 侍ありしよ

衣裳は直衣唐鏡古代のものに 縁起 柳上 大口を着る人形柳の四角あり

形俗に和名は三郎新衛と云信玄の人にて源清 仲の喬の勇力勇気万人に傑出せ大形を肩て

水陸を上下せしり 杉生人形は於て謂有といふもをそくく船に 舟をさす物ものあり

軒天沖山 油小路後小松下止町天沖宮を 或はよいてく村上天皇天曆元年六月九日 唐しあり其日丑よりあつり 形は後の人の丑の日

を天沖山詣 正面朱多岳 額天沖山妙法 寺といふなり 院宮竟然然主

新洞の内に天沖の宮あり 木像高丈五寸宮の 前より大蓮花基にのり 為服に隨身板あり

但三方階あり擬空殊付 慢幕 言辭 緋も 緋も

得得と緋正面山岩は獅子の滝あり服得と緋 上風を豊松竹の滝三方とよ小縁あり(于地雲天

洞幕 緋付紗松 見送 緋の緋も(唐子あそび縁 緋と緋もづくし) 唐子あそび縁

方子山 油小路高上町 重権方子攝津國 四天より建立のあり 木を伐

人形 木像 運茶の作右の形より 木像 運茶の作右の形より 木像 運茶の作右の形より

張良の 二番 蜀江の 三番 朝掛 朝掛 朝掛 朝掛

地獄の名不知 胴幕 緋 見送 緋の緋も(唐子あそび縁 緋と緋もづくし)

白樂天山 室町通後小松下止町白岳乃林祥 師よりなるを問ふて茶敬せし物

人形 名原乃林祥師の像長四尺余衣裳は 赤い紅衣を着る帽子花を紗

指あり紺地金二枚具并に珠粒ありす 同白樂 柱杖金うち二つあり 天の

像長五尺餘衣裳玉虫粒好 水引 紺地金 祇堂守金あり織入る唐冠着筋を

胴着 三三竹得と緋よりいと 見送 地人ど 夜をり

函谷鉾 四條馬九西入町函谷といふ秦の関 昭王の臣(下)家當貴人より三寸人の者を

外のを室と名昭王を衣はると計る孟嘗 外のを室と名昭王を衣はると計る孟嘗 外のを室と名昭王を衣はると計る孟嘗

れりて衣去る日函谷の関中より 函谷の関中より 函谷の関中より

ハ出(手)やうあると云ふに三子の客の中より 函谷の関中より 函谷の関中より

函谷の関中より 函谷の関中より 函谷の関中より 函谷の関中より

函谷の関中より 函谷の関中より 函谷の関中より 函谷の関中より

雞の鳴まぬをする者ありけり
雞の鳴まぬをする者ありけり
雞の鳴まぬをする者ありけり
雞の鳴まぬをする者ありけり

出之花
金の草花
出之花
金の草花

上水引
純子縁すささ
上水引
純子縁すささ

二番
赤地綿るに
二番
赤地綿るに

水鏡
水鏡
水鏡
水鏡

天井幕
純子縁すささ
天井幕
純子縁すささ

見送
袋表具紺地光金
見送
袋表具紺地光金

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

銅掛
毛七人
銅掛
毛七人

老婦 食を強ひあふる女は又女の二也
子を埋く母のミヤシるんとは黄一を案
を極め地を切けるに地中より黄一を案
を生れ別決のれは書附ありといく考
子部巨は黄一を案を切て人形部巨
汝子部と云はれり此書は黄一を案
に極め地を切るを案を案に衣衣付地
金二寸臍いわたりを案金紋紗唐子右の
やに團丸のみに牡丹衣衣付子付
もは別決紗付る子部金の金一ツ水引
赤地乾 二番 紺地金入 前掛 紺地もやう
縹紗のりい喜老人 縹紗 紺布縹紗
縹紗子部と云はれり縹紗 縹紗色布交
縹紗のりい見送 縹紗を案といふ縹紗
縹紗ぬい見送 縹紗を案といふ縹紗
縹紗ぬい見送 縹紗を案といふ縹紗

△

鷲鉾

室町四条 出三 金の牡丹茶巾袋

天井幕

紺地 上水引 紅地 二番

下水引 紅地 二番 地

明掛 毛襦 三枚の白 虎梅

見送 縹紗 縹紗 縹紗

縹紗 縹紗 縹紗 縹紗

△

傘洋

六角 窓所 入山 毛布

傘の上 金飾 金飾 金飾

行列 傘指 三人 見三人

三人 白大目 二人 鞆

三人 白大目 二人 鞆 持杖

三人 白大目 二人 鞆 持杖

三人 白大目 二人 鞆 持杖

三人 白大目 二人 鞆 持杖

囉子万延二人を靴一人笛一人いりて地菜
を着る **警衣** 指指六人竹引 **緑起** 緋糸
すれども毎年緋といふ
先古耳緋の形に

山伏山 富町御小坂上ル所 淨翁貴所といふ
修験の後ある人あり山頂の必愛宿
の郡祇園の南ハ坂の塔のゆうきとそを
祈りたるとそを修行と云ふ **人形**

淨翁貴所の像右の手に持珠の手に弁を持
繰よりわりの只を肘若よりの衣裳赤地緋を
羽衣紺衣金紋紗 **水引** 三つ折りかかすを
つら子

下画為尺 **茶掛** ほんまく左右赤地古金襴安
探錦の形也 **尾紺** 地色緋切すよ風

白の巾着 **中** の切 **慢着** 老老せ使すは
元波金地金らんを深 **地古金襴金地銀**

襦色 赤おかし **巾着** 巾着 **羽着** うちき
風守の巾着 **厚ぬい** あり

見送 紅緋 **懸地** 紅 **懸地** 紅 **懸地** 紅 **懸地** 紅 **懸地** 紅

の物又ハ徳刺の幅 **懸地** 紅 **懸地** 紅 **懸地** 紅 **懸地** 紅

色多あしてちりし付に **縁** 縁 **縁** 縁 **縁** 縁 **縁** 縁

巾着 起 **人形** 淨 **赤** 赤 **赤** 赤 **赤** 赤 **赤** 赤

只ハ山伏入 **赤** 赤 **赤** 赤 **赤** 赤 **赤** 赤 **赤** 赤

の件しといひ

△ **霧** 天津山 **緋** 小臥室町南 **往** 昔 永三
中 甲 火災 焚きし 乙 時 ありぬ

巻五

霧 **緋** 大急 浴ぬあや **緋** 緋 **緋** 緋 **緋** 緋 **緋** 緋

上より **緋** **緋** **緋** **緋** **緋** **緋** **緋** **緋** **緋** **緋**

号し又ハ **火** **際** **天** **津** **山** **緋** **緋** **緋** **緋** **緋**

朱 **名** **之** **居** **款** **天** **津** **山** **緋** **緋** **緋** **緋**

向 拜 **緋** 正 **面** **と** **び** **玉** **ぬ** **り** **金** **物** **太** **右** **金** **箔**

極 彩 **緋** **松** **梅** **太** **右** **金** **箔** **正** **隨** **身** **扱** **下** **樹** **み**

二 **つ** **大** **廻** **廊** **三** **方** **瓦** **層** **根** **彫** **拍** **四** **季** **花** **各** **一** **方**

紅 **梅** **宮** **の** **服** **小** **松** **十** **本** **宮** **の** **茶** **湯** **慢** **着** **希**

正 面 **三** **布** **撲** **四** **布** **金** **入** **色** **合** **在** **文** **掛** **物**

月 **絆** **四** **条** **新** **町** **末** **二** **町** **絆** **の** **末** **出**

花 **壇** **赤** **土** **壇** **左** **壇** **右** **壇** **右** **壇** **右** **壇** **右** **壇** **右** **壇** **右** **壇**

引 **て** **う** **せん** **流** **す** **ま** **き** **二** **番** **紺** **地** **右** **葉**

二 **番** **あり** **三** **番** **あり** **三** **番** **あり** **三** **番** **あり**

物 **地** **緋** **毛** **さん** **あり** **見** **送** **紺** **地** **右** **葉**

下 **に** **小** **流** **す** **ま** **き** **二** **番** **あり** **三** **番** **あり**

春日仙師作長れ五尺在の多た藤花のまた
若を指衣表こん地うき上よん衣裾よまき
の大日月 上縁のまきり 翁掛 紺地名を
口 松あり 慢幕 朝解み 紺
血新胸背まきり 慢幕 紺
志ゆきり 紺 慢幕 紺
右三色 立引なり 見送 厚地和紙
雲面 蜜り



菊木鉾

室所四条上町 鉾の形は菊
をうきする 菊陽都縣は甘谷といふところ
みよの左右は甘菊生れ其水の中一葉
此れをのむ七の妻毛 と抱朴子といふ
此見ゆり生れ

出之花

菊大まきり守枝六本各葉
付壇着よきくの枝あり 天上

幕

厚ざりまきり 上水引 紺地
水引 紺地 二番 紺地
水引 紺地 二番 紺地

水引

紺地 二番 紺地

花

花 二番 紺地

見送

厚ざりまきり 見送 厚地和紙

人形

人形 紺地

小面

小面 紺地



孟宗山

鳥尾陽の山 呉氏の
母筆をのそりける母の筆の
るりしうは孟宗山 林より
りしうは孟宗山 林より
るりしうは孟宗山 林より

水引

水引 紺地

二番

二番 紺地

翁掛

翁掛 紺地

慢幕

慢幕 紺地

見送

見送 厚地和紙

人形

人形 紺地

小面

小面 紺地



保昌山

東河院 言下町 平井の保昌
保昌山 東河院 言下町 平井の保昌

水引

水引 紺地

二番

二番 紺地

翁掛

翁掛 紺地

慢幕

慢幕 紺地

見送

見送 厚地和紙

人形

人形 紺地

小面

小面 紺地

王冠の多きものありておのれを多きもの
 上より踏込ん地をありて多きものありて
 ち他大なる鏡印のをありて割つて小
 大なる大袖冠のいもむありてのど痛いつ
 れも古代の名ありて金飾の桐原の多き
 金飾の草のさやつらつり多きものありて
 鞘服の蛇腹金さやあけかへは虎尻
 毛びろうじと上帯五節紫緋白のさやめ
 不念をさねありて大昆所つとらかひの打
 御殿を根柢ふきつて金飾のさや水引
 くぬいのみりて種糸の孔雀の多きものありて
 めつしき多きものありて金飾の地をありて
 毛びろうじと上帯五節紫緋白のさやめ
 犀撲の多きものありて四通かき地
 地多し地蜀江錦のさや金飾の純子桃も
 地蝶のさやありて右四名ありて見
 送花も地を錦水も送
 へりてさやありて
 華鋒 四條西洞院西下町 素多鳥さ
 巨目を退治しあけかへは鬼とも
 主は捨ててさやありてさやありて
 か天竺のさやありてさやありて
 の上 花飾の生の松を飾り三つをさやありて
 よりも多きものありて三つありて地をさや
 垂衣地 行列見三人 或五人も出ると
 衣裳の飾りありてさやありてさやありて
 とんはありてさやありてさやありて

△

太鼓鼓見二人 上下を着て衣裳のありて
 太鼓持男二人 たまにありて
 上の右の兒と 笛男二人 床に持子供
 十人 多きものありて
 一人 持ゆりて
 裾はさんまらさん 笠置園 持ありて
 金へのさやありて 二行を林をありて
 放下鋒 新町四条 出立地 持ありて
 根もとさやありて 轆二首ありて
 筆 織物 上水引 多きものありて 下木
 引 糸甲 二番 多きものありて
 郷 櫻掛 見送 多きものありて
 うら 柳の房 梓頭 洲濱の形ありて
 光も下 二つ出ると其形角のて
 降さの木ありて 降のさやありて
 寛文の尺二尺本 五尺ありて
 五尺二尺の人形 放下師のたもありて

△

太鼓鼓見二人 上下を着て衣裳のありて
 太鼓持男二人 たまにありて
 上の右の兒と 笛男二人 床に持子供
 十人 多きものありて
 一人 持ゆりて
 裾はさんまらさん 笠置園 持ありて
 金へのさやありて 二行を林をありて
 放下鋒 新町四条 出立地 持ありて
 根もとさやありて 轆二首ありて
 筆 織物 上水引 多きものありて 下木
 引 糸甲 二番 多きものありて
 郷 櫻掛 見送 多きものありて
 うら 柳の房 梓頭 洲濱の形ありて
 光も下 二つ出ると其形角のて
 降さの木ありて 降のさやありて
 寛文の尺二尺本 五尺ありて
 五尺二尺の人形 放下師のたもありて

うしはつこを射てお伴縁起たる
なりは子帰と格とを
子神もあましくは
作りしものなり
亦但南郷あり引山



岩戸山

新所言上上町也 天照大神天
岩戸を出入りする容をうづり

冠前貴 天照大神 洞の内は白衣を
鏡を御及玉冠

鳥井 岩戸山と
上水引 角能地
下

水引 一番地紫
二番 柳子
地

織前 地
羽着 田所

見送 付地金糸
下孫あり地人
下地

見送 志あり
下孫あり地人
下地

起 伊弉諾尊の
人形山の上より
天の浮橋の上より

逆降 をとり
天の浮橋の上より

のいそを
出るる
此説を口傳し

船降 新所
退治あり
出船の作をうづり

人形神功皇后 天冠金
天冠金
神功皇后の大神の
のより



鹿島明神 紺の大神
大長刀
和泉守 但吉明

神 黄の大神
大 安曇碓良 小袖
大

上水引 地
上水引 下

水引 地
水引 二番 三番

由 手
由 朋布 木布
朋布

舟 今
舟 船隠 舟
船隠

下 水引
下 櫓 櫓
櫓

十四日 日
十四日

栢 栢
栢 辨慶山 山
辨慶山

人形 人形
人形 舟 舟
舟

牛 牛
牛

大 大
大

地 地
地

牛 牛
牛

大 大
大

地 地
地

牛 牛
牛

大 大
大

天文六年 信玄右近作 此金真師 八南所
あはれける 加町の古名を 信玄町といふ
あはれける 加町の古名を 信玄町といふ
あはれける 加町の古名を 信玄町といふ
あはれける 加町の古名を 信玄町といふ
あはれける 加町の古名を 信玄町といふ
あはれける 加町の古名を 信玄町といふ
あはれける 加町の古名を 信玄町といふ
あはれける 加町の古名を 信玄町といふ
あはれける 加町の古名を 信玄町といふ
あはれける 加町の古名を 信玄町といふ



八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら



八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら



八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

八幡山 三條 朱鳥鳥居 二おむら

入衣の帯に衣揚杖拂子を 尊城の神

花子あり 女侍あり 子に湯室をとり衣

裳厚織金湯の干衣金五出を 緋の袴

善鬼 緋の袴に赤をとり 衣裳の袴

地金湯すそよ 水引 袴をとり 子に桐子

大日孁 あり 風皇の 滝

為掛 中の地中金岩より 洞掛 袴に

志向の袴中より 腰子小飛袴 六岩子水

冊那珠水晶オの 右腰より 金丸大

服その他 志向の服を 右に 袴の袴

四條よかくる 志向の 袴に 袴の袴

ホの袴あり 袴に 袴の袴

の袴より 袴に 袴の袴

合をいすねさる 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

志向の袴に 袴に 袴の袴

△

浄妙山

六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

浄妙山 六角通富所東入所 浄妙山

△

黒山

黒山 六角通富所東入所 浄妙山

黒山 六角通富所東入所 浄妙山

黒山 六角通富所東入所 浄妙山

黒山 六角通富所東入所 浄妙山

黒山 六角通富所東入所 浄妙山

黒山 六角通富所東入所 浄妙山

黒山 六角通富所東入所 浄妙山

黒山 六角通富所東入所 浄妙山

黒山 六角通富所東入所 浄妙山

地い雜せん子登りの我を金糸もて遊むの
侍の左衣に胸背といふものも先は餅餅
人の官服といふものも先は餅餅
み一方は五明見送見送は地獄の使者
百鬼の形を尤もなす
縁起此人形世は西行様といふ又里一
の像もいふたはあはれに 撫まは
を誦するうてちり古今の序は太傳の黒ま
い其は内中いりし菊を原るは内人の
花の落よめをあらうと 上何りこれ
作をいづる也則そをを作す
人形也古老の傳はむりは人形撫ま
の風俗もいふたまき一宿を其下よ
杖よりて花を誦する作をいづるとい
つめはよりいふはまきをいづるとい
形く中古よりいふまき 又老來後を
糸り其伴を他人言老のうてちり
て何といふるをいづるとい
鷹鷹の山 三条新町末入所 鷹物の作
女つういの人形あり又一人の從者様を
まは様を指して食ふまきをいづる
加太郎山とも指す 人形指す山のたりの
ともいふ
年耳四十をくりの男侍をいづるを
右のよにて大粒をもつに衣裳を毛餅
綿上よみ干栗皮 鷹鷹の山 鷹のたりの
色の秋也 鷹鷹の山 鷹のたりの
色の秋也 鷹鷹の山 鷹のたりの
色の秋也



とむらひ命をいづる六十をくりの男侍をいづるを
を着したは鷹を辰衣の子に餅をいづる
お衣裳ハ紺地の餅餅もきき餅餅は
秋中あさきハルツ後のさめきをいづる
丸遣山のたりのまき 丸遣山のたりのまき
襦襦を指すハ山の上の右のあり居る衣
裳ハ毛を毛餅餅もききまき地の秋中
さめきぬき 屋根鷹の山 鷹のたりの
まき 屋根鷹の山 鷹のたりの
まき 洞洞の所にてハ
屋根鷹の山 鷹のたりの
まき 上木引鷹の山 鷹のたりの
まき 下木引鷹の山 鷹のたりの
まき
紺地浪二番 二番鷹の山 鷹のたりの
まき 二番鷹の山 鷹のたりの
まき 二番鷹の山 鷹のたりの
まき
どの 明幕三方とて織物 見送鷹の山 鷹のたりの
まき 見送鷹の山 鷹のたりの
まき
又獅子吼の三字金糸にて遊生ハ二種あり
一種ハ名はくし遊ぬいぬきき縁付又
二種ハ名はくし遊ぬいぬきき縁付又
三種類ありまき木仏就
星のうらぐらひ



船鉾新町 四條下町 舟功堂 舟功堂舟功堂三韓
人形者七日 舟功堂舟功堂三韓
船とある 舟功堂舟功堂三韓
を指上着二やあり一面ハ地獄又一面ハ白ぬめ
地白の隠入そのうは黄衣ハ干栗皮の中
あり船のまき 破良合掌のすうし 破良合掌のすうし
ハ純子なり 破良合掌のすうし 破良合掌のすうし
住若ハ里の紗 麻嶋右はそ刀左は虎 麻嶋右はそ刀左は虎
住若ハ里の紗 麻嶋右はそ刀左は虎 麻嶋右はそ刀左は虎

小袖を着秋 屋形此内は神功皇后 至幕
のうり衣 屋形底の形あり 至幕綿綿あり
右形の天上あり 屋形至幕菊方方花
左地金まきくぬり あり 金梯袖あり 大水引裡に船相恩
前掛袖あり 下幕波のあり 船屋形三幅 綿純
尾程船金糸 船水引船五色
ぬい 握浪よ波をぬい

○ 毘沙門功徳徒

警備新式

毘沙門功徳徒といふ所々の陰陽
師とも肩衣袴よそひやもんめ
係を治めよありきく家こよそく
しゆよこしくしゆよのあり
姑ハ秋氏の注よりく後かめてな
るしを云くつるじ

○ いねつむ

月

いねつむいねあくる三ヶ月の
寐起をいふは寐の字を書きて
和訓イヌルイヌルイ子ナとよめ
イ子子を福よそりありしツムア
クルハ福の詞也

○ 御想文

月

御想文といふハ左日宣の刻より所
を賣て通るし毒さをく南よる志
なりよそありくし先は残をあ
よつねそ女の縁の目出なありし
といふるしを福よつくりめくして
洗米をあそくし今いふて
そのるしなけねえうるす
らけあるむい恋のふそのわくに
是くたる人もあゆくは侍を

してよき事 信されハ一句、意
あるハ 皆未嫁女のこゝろ、陰
陽師の禮をあるる之、生禮の文意
多くそのと の内よめて交えん
あるハ、あるをよむるねえ、ヲモ
ヒヲカクニモニと書きて、りさう、あこ
よ、いふる、し、誰ハ、又書よある
と知

平岡市粥

同

平岡のは粥、二月十五日、河内
必む、おろ、粥、あまて、十五、の、
内を、いれ、その、中、志、の、井、の、
を、三、入、ル、よ、その、日、の、南、作、を、
志、を、い、ら、し、さ、い、ハ、平、橋、中、橋
取、橋、と、三、交、ハ、甘、平、管、ハ、粥

の満るを古くは満るをい
よと

妻の宮

同

妻の宮といふ、く、の、満、る、
御、た、ま、の、の、や、と、や、て、い、
ま、は、あ、る、う、い、い、い、

おのひ

同

おのひ、おと、田、の、お、は、清、帯
或ハ、柿、を、い、た、さ、く、田、の、
を、お、ろ、く、也、の、水、は、ま、つ、い、
あ、い、い、

油系のお

同

油、花、の、お、も、ろ、く、ハ、三、月、三、日
毎、日、お、祭、の、お、花、を、以、て、あ、が、ら、を
つ、け、の、中、に、お、い、て、お、ろ、く、

孫也鳳たつとのまういよあつた
花や雪のうらまに花ゆき
あけえたるしとくとも多
い鬼女のこもむねにト並ま
よし

○ 法華会内福義 増山の井

法華会内福義十四日法華会
の法華よても麻よてもをこま
問者講師あど法華よても福
義よても内福義とやとらわ

○ 徳申 同

徳申 大徳を引合へ徳申よ
付て去込を知也

○ かゆつえ 同

かゆつえちのし記志とよえ女

の腰をこらたひれは是まうい
れたる者ハ男子を産むといり
花子産むらもの本とあり 狭衣
よらゆ林といりあつまのう
よもぐりけといりおまへ人を
赤る一はし

○ 厄神集り 同

厄神集り二月十九日これハ
ハ儒の厄神はまういよとそん
おまのあつたもとめて物
こ神代は牛取天もそんハ情
をえあつた汝り子孫形災
難をまぬる一ハ折言あつる
ゆくそん物ま子孫といふ
だをうけあつるなり 厄神ハ

牛乳天までるべし

秋生菓子

同

秋生菓子ありしは二月百々

も年袋は百穀瓜李の葉種
をへてお送るをいり

新菓子

同

新菓子三月四日各神宮以下
三子百三十二箇の種をおふけ
ますしつとせぬふき年をいり
を流す也

列見

同

列見三月十日より糸火然言
外祀史を冠し祀をふして
た海女もしおころをふり
六位以下の藝能あまのを撰

て式ア兵アの二省よりひきあて

すいるを上げしよとえは景容
儀をさるゆり列見といやとえ

も精飯すも飯飯も是もを食
も楊桐の葉をふれ飯をほれ

まゝくして光ありれをくしを湯
氣をたたく及山家にいせし粉

乾石肌といし是を赤肌飯也
云々

賑給

同

賑給といし年々も民も米糧を
を給ふに年中條里小畝を分て
檢非遠使つりてこれをひく
市神の市ト

市神の市ト六月十日神祇祭

の真宿人主上の玉新はほつじ
あつるをうふなむ養は
美あり

○ 神今食

同

神今食六月十日こけの食に
二交し伊勢を神宮を御神
さゆて天子をみくふ神饗を
供せさせぬあやむ

○ 解母の法粥

同

解母の法粥六月十二日神今食
の次の朝ひの湯殿の大床子
て基礎一膳をうて供せ
ほくもあまの志は和布の湯汁
拍をそくあむり三口食て少
箸をうてい

○ 舟のぼり

同

舟のぼり一年よなあまの川
をうてまふし

○ かさきの橋

同

橋の橋かさきのよりの橋を
かさきの橋といふおるし
この織女は天帝のむすめか
まを河の西の牽牛まよ
あそをひてのち機をうて
父もうとく年を天帝に
て申を上げて天河をうて
ままめて七月七日にあふるを
ゆるあま村鳥橋は橋を
て織女をこけむしつり又川
をけり舟えわさるんをあま

寄よはよめり又別帳にとりて時
紅液を橋よおとけを紅葉の
橋といふといひり又紅葉
よよめり寄よめり

維摩会

四

維摩会十月十日是ハラふり
十六日とて七ケ日真福寺にて維摩
会經を講せらるる十六日大織冠
のゆり忌むわもいひあり

子か念仏

●習ふ教式

子か念仏此寺の庭は普賢像の
さくふみ此寺のさうりを待えり
祈ふ

男一

四

おろちりの花おとこ一男

郎花と書再々そのまを
あくしはくしきさくし花白
さくしはくしおとこおのり花さく

●祈 例あり

深の

四

深の田ののりさくしはくし
ちりしき枝川をさくしはくし
おとこおとこに竹の節を切て
仕つけさくしはくし
はくしはくしをさくしはくし
よき節のさくしはくしはくし
抄おとこおとこ

四方お

建武年中行事

追儺をさくしはくしはくしはくし
よき節のさくしはくしはくし

北窓来いそくをとり事を行ふ人
小舎人やうのもの声くよことた
つきつゝあきもあうふあはるあき
大宋の清屏風を北面よよそく
らして沙羅を北面よよそく
まゝあつて沙羅をくくよそく
いものそくあつても實の村よそく
の人あつては北窓来あつて
黄極漆の清袍帯のこころ
清涼殿の三間の格子をあけ
て出たそくまはるよそく
道布毯を志きり屏風の
もとにまゝまゝの物のこと
そくまはる北窓の中清涼殿
さくまはる屏風のももとにまゝあつて

頭清簡を清の先ッ小
辰をおもひて二拜次
よ天地四方を拜もつて二拜
あつて清のうに禱を
北向めん天をお 乾もむいて
地をといれ子の方より卯午
酉四方各二拜し清の茶よ
白木のほくくよあつて
まゝり北辰を拜もつて二拜
あつて二儀あつて二儀
又一帖ををまゝあつて
そん再おなり沙羅の皆あ
面のまゝあつてあつて
そくまはるまゝあつて
供沙菜 日

うちつくのちいさういぬをぬれ
清直衣をきる不列海いぬ
うまづるいぬ今帰 翁人とも
かみあきけうぞくしくい種
はけく書い種い清い種南
のちいぶのぬの間はいぬあり
中三、間或は二間い種もとの
まよあけありをぬく此帳
そもていぬをぬちうぬい種
たうとにうあありの間一箇中
ちもあぐらういぬあり
ことあり今の代はあか依
はまうせはけいぬのぬい種
鉤丸をあく清直のまよい種

服の典侍の園●種い種
次の南島種一枚をぬりぬい種
種い種石灰の増北のぬい種
西東の法いぬあめいぬい種
ぬい種今帰 翁人の種い種
南才二の間ぬ弘相い種
一枚をぬり種い種後取の種い種
典侍以下女房皆種い種
種人二人鬼の間ぬ種い種
ぬい種い種い種い種先い種
清直い種い種あか生氣のぬい種
清直衣をぬり清直衣のぬい種
かきぬてい種 陰膳の典侍種い種
うい種い種い種い種い種
ぬい種い種い種い種い種

さうなれば後衣の人もあつたり
大相をいふ女侍人のあつたり
これをいふは五日の精進のあつたり
いづり三日はなほ散敷を世に
此は此の樂の修式は三日あり 三献
のまはむの物との東の戸なむを
て是をそのまのまのまを
関より隣膳より使ふまのまのま
後衣より法をまのまのま 三献
まのまのまのまのまのまのまのま
一盤よりまのまのまのまのまのま
二宮大食 曰
二日二宮大食あり 玄輝の東西
の廊より出るありちのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
卯林 曰
卯の日もあつたり卯林のまのま

り六府なる法にもあつたり
の方の敷きすのまのまのまのま
卯林をおもむ 梯一のつくり
あつたり 甚だ盛ふまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
をいふまのまのまのまのまのま
る卯林をとりて書のまのまのま
のまのまのまのまのまのまのま
四のすまのまのまのまのまのま
真言院のまのまのまのまのま 曰
後七日の法よりまのまのまのま
卯林を法よりまのまのまのまのま
をいふまのまのまのまのまのま

乞をゆ

○ 寺有念内福祓 同

二月十四日沙弥弁念内福祓あり
公卿右近陣の座より往く本陣
宿営をまうく着陣しつゝ
次將末のよこ座につくけんま
あり次將をを法とむ三献
をてし僧入庵をせんあれえ
乞をゆみ出居の次將す
かどの下の座よりつく公卿茶
の座よりつく沙殿の座を
れあり日の湯の座の座より
の机をゆき散杖具し
二の座のまよ僧の座元子を
あり北より昆明池の障子を

其まうきに元子をゆき加持
善ある人なり立の後二人の座
をゆきつひきよ南よあれえ西
むきに僧細の座よりこよ福
函の座より座子也後七日の所
淡野東寺の長者なれえ茶を
ひちふして仙社門より入て長
橋をのりゆきまのこをを
着座を僧たはまのある
あがりすまし加持善あるのさ
あうをゆぬぬえ奥福寺の
別當あり権官あど時よし
あがひてその人福函をゆき
それゆあるい法師問をゆ
大法師をといふ二人若しあ

●文字をたゞくいて多く
さしけりて巻中しる也

○巻首のしるし

五月三日六府巻首のしるしを
南殿のちの東面より四
あはれぬのうらなひに
とのもんまゝにふくま
ぬをさく

○巻首のしるし

六月一日巻首のしるしを
昨日のしるしより上格子
より巻首にあはれぬの
あはれぬのしるしを
入て供をも次はしるし
まゝすしるしを

●巻首のしるしを
みるはしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

●巻首のしるしを

とびとちりあつた藤より一巻だけ
まいる七月ついでのもうまは
ちつとも備ふる

乞巧奠

同

七日午後八時ころど致す
たよつて乞巧奠あり、庭より
四段たて、燈籠九本をめぐ
り、火あり、札よまこの物
はくしりさしこのことむす
是をおくはく急の火麻よま
はくふそふあき有、信物
寮とむすを養ふとむすに
三の段あり、おハむん、
半呂半律、新の志くむなり
是ハ編るに、竹ゆくむる人

まぐぬ

駒

同

八月十六日志あつ駒ひき
甲斐のるむす以下あり
あれどもちりはくしり
甲斐の清馬、この一巻年
おらし出られ、る、
ハくまて、縁、上、陣、の、
おつと、解、文、を、養、ふ、
相、弁、少、彼、言、近、傍、つ、
の、建、禮、門、の、前、を、
着、り、清、馬、の、り、
弁、位、次、官、次、お、
お、り、福、あり、
子、た、れ、ハ、あ、む、

多ぶらり内裏を一行
よ二座子とてしるやいあま
かり候事案あし引付けの
使より西條に清言がて
系る祿ありうちく清
賢をどありて清言を云ふ
なる

五節書

同

十一月廿五日五節の事お姫ま
いる四人の内一人系る其儀
式あり其外の内くまいる
をバ曉氣といふふ系り
のありて帳巻清あり殿上
人ども志そくにさふぬま
清言はしり指費めて

清言をめまるとハは村の外
ハあり候儀清言の時ハ帳巻
の試み清言のめまるとハ
候巻もおまるとハあはれど
礼言のありびんをうらな
う~~あ~~子大うさふうさふと云
るあり

殿上清言

同

十一月寅の白殿上の清言あり
朗誦今候をどうして三
んをてて礼言あり次才
書をらりて女官の戸のあり
てうらなを清言のめま
より下にありて北の陣をめぐり
五節おまむふは後不

多ありてまゝいさうなごどあり 野
曲の掌をうけてまゝいさうなごど
うゝゝ一店懐女院あど流癖
あれをうゝああよゝのゝど也
童女少遊覽 何

十月卯の日つゝハあいらん
清涼殿よめ してあいらんを
下はあひ一應上よめれのわらわ
れの甘みうみまのわらわよりうゝを
あきいれわてあはせんれりるどあ
肉付糸の御浄楽 何

肉付糸の御浄楽 主上行奉
あり 先曲付掌侍まゝいる次侍
ハ童二人ハ木丁をわらわさうり
肉付糸ハ行奉なりぬれを
清拜 刀自のとあそや 此

間 所作人南殿の西の方より
物の音あそを肉付糸の音よ
このもんれゝ 慢を引て宿人
庭火をうゝ一奉束の舞三行
はあうけゝゝの遊情の召人
うゝゝろよ有人長束よよと庭
なり吹糸ハ庭ハ清く人長束
きてひあつさゝさうせわうり言よ
あといま 一巻を次束よめま
笛ひちりきもとす急の音
和琴ハ次束よひあつさよつま
つゝままつる人長束あすきた
まゝあひて笛ハ和琴拍子も
にまゝあめ束の拍子ひちりま
あまうゝく和琴ハ位よま

本の上より扇花 鞍座をなふ
ゆつみやよりあなを庭火本末
をそへ人長うより入とりの
をてへかす神の拍子あけて
後人長をもちてうあづる其
のちけんをいあへかす神
てへ又まゝておの男めを
をめへ庭のまよりすへて
ひびまづもそくつこも
枕より千歳をなすあど
をそぬれへ星おるせしる笛
ひちり記ぬとして早三首
をそ朝倉その弱つひのい
と 祿をあふるとぬれ
本願より見しあり

○
仏名

同

沙仏名十拍より三日をぬれど
へい大やう一おせり沙帳の
中は本名うけ南のうぶの
まよ又南ふよれをそへ
佛像塔形をそへ仏名よ
鳥名ふとね備ふ二幅を
よりひきへ地づく雲の沙
屏風をそへいよのせい大宗
の清屏風なり地づく魚ん
んくげ出展めをけさせう
かうのいごう 出展の茶よ
大びつよおり松せきを女儒に
れをつとむ公ひひさにはる
お取中お後おをの

此の油の清浄に於ては、
木綿の油と異なり、
木綿の油は、
木綿の油は、
木綿の油は、

此の油の清浄に於ては、
木綿の油と異なり、
木綿の油は、
木綿の油は、
木綿の油は、

油師の作る油は、
これをしるまゝかぎけ綿の
あつた衣をこの油に
をすて、この油の方
の籠下といひ、
いづれの人油師の
よかづらぬやうに
あり、その籠下は、
の油師の作る油は、
この油の清浄に於ては、
木綿の油と異なり、
木綿の油は、
木綿の油は、
木綿の油は、

かぎけ綿

同

この油の清浄に於ては、
木綿の油と異なり、
木綿の油は、
木綿の油は、
木綿の油は、

此の油の清浄に於ては、
木綿の油と異なり、
木綿の油は、
木綿の油は、
木綿の油は、

この油の方の油師の作る油は、
これをしるまゝかぎけ綿の
あつた衣をこの油に
をすて、この油の方
の籠下といひ、
いづれの人油師の
よかづらぬやうに
あり、その籠下は、
の油師の作る油は、
この油の清浄に於ては、
木綿の油と異なり、
木綿の油は、
木綿の油は、
木綿の油は、

同

大物の籠下は、
あつた衣をこの油に
をすて、この油の方
の籠下といひ、
いづれの人油師の
よかづらぬやうに
あり、その籠下は、
の油師の作る油は、
この油の清浄に於ては、
木綿の油と異なり、
木綿の油は、
木綿の油は、
木綿の油は、

栢梁御衣

同

此の油の方の油師の作る油は、
これをしるまゝかぎけ綿の
あつた衣をこの油に
をすて、この油の方
の籠下といひ、
いづれの人油師の
よかづらぬやうに
あり、その籠下は、
の油師の作る油は、
この油の清浄に於ては、
木綿の油と異なり、
木綿の油は、
木綿の油は、
木綿の油は、

○

同

法いふ大とゆりまう鬼を
陰陽寮書さいもんをもちん
南殿の版あつまをい上り
以下これを逐ふ殿上人ども
清殿の方よ立て祝の弓差め
矢よける仙学門より入て東
庭をうて滝口の戸よりい
私よその火を木はく
東庭あさうねみかすい
赤のまくみさうりよ焼巻をひ
まなく立てこるんぢり

小形お

装束抄

建武御抄

小朝拜御位袍御靴云

ちり系

古説

日

腹赤魚者鱒魚也出自筑紫宇土郡

長濱

除目

魚魯愚抄日

除目叙位時撰申文事資仲抄曰

於書御座南程大床子撰之云

大原殿

世二社註式日

日記曰仁壽元年二月二日依太皇太后

御祈山城國葛野郡大原野仁宮

柱廣立春冬御祭加賜

中右記

日

寛治六年三月三日有御燈如例頭辨
候陪膳藏人大輔益送撤御贖物了
後有御拜件御拜依為由御被往
昔無之後朱雀院以後猶有云

かみ茂系

長秋記

日

保延元年四月記曰賀茂祭令詔

頭字類
此字誤

飭馬具、杏葉蝶形鞞、左右各五當胸、
七、當面十也、餉付鞍後のひき、左右
付五金銅也、橋黒地表敷、紺地繡、韉
豹那女鏡、手綱、芳雲珠、頭、総共蝶
也、无腹鈴、近來不用、鞭、繪鞍、覆他
物具如常、差繩、白、云、

最勝講

世俗淺深秘抄

最勝講之布施、祿之祿、蓋習也

内侍所

建曆御記

自神代為神鏡、如神宮奉仰、為
伊勢、御代官被留、最世神、更次第同
伊勢、世始同、履御座、間主上朝夕不
放、御本鳥、垂仁、天皇、御宇始為、別
殿、御温明殿

御神樂

同日

自一條院時十二月有御神樂、但

多、隔年行之、近代每年有之

又、有臨時御神樂

玉虫

憎心の井、非本詞、之部

玉虫、自徳、説難あり

情、鈴

同日

とん、ぶらう、自徳、説難あり、一説、み、い

能あり

か、い、る

同日

か、い、る、自徳、云、難あり

木の葉

同日

木の葉、自徳、云、枝、よ、ろ、ろ、ぬ、ぬ、句

神あり、難あり

木の葉

同日

木の葉、自徳、云、枯、木、を、い、つ、難あり

よおひいでもあまのいとし
ておひいでもあまのいとし

おのろみのをうへておう
しうきよいそいれあまのいとし
うらよいとしきりおあまのいとし
うらあひきうるえはむくのあ
やとある

石上不甲 神社啓蒙

石上社者在大和國山邊郡布留郷所
祭之神一座 石上都御魂神舊記曰磯
城瑞籬崇神天皇御宇遷建布都大神
社於大和國山邊郡石上邑則天祖授
饒速日尊自天受來天璽瑞玉同共
藏齋号曰石上大神

同同 神宮御鈔

石上社者素戔嗚尊所持之十握劍
也以人皇十代崇神天皇御宇鎮座也

龍田日 同

龍田社者在大和國平郡郡所祭之
神二座天御柱國御柱神舊記曰廣
瀨龍田風水陰陽二神也故名天國御
柱也

愛宕 同

愛宕神社在丹波國桑田郡水雄北
所祭之神二座伊弉並尊座火彦
靈尊座按當社者昔愛宕郡鎮座
之故有此名今北山大門村蓋當社
宮神門之舊蹟也故今所祠之地雖屬
於丹州温其故号愛宕敬延喜式又
以當宮接桑田郡無山州鎮座之記文

白鬚

同

白鬚神社在近江國志賀郡境打下
所祭之神一座猿田彦命鎮座年
紀未分明

水石寺

二月水石寺引

倭漢三才圖會

和泉國

水間寺在木島鄉水間村舊真言
宗今天台宗緣起曰龍谷水間寺聖
武勅願天平年中行基開闢本尊
正觀音以二月初午為會日相傳此
日運步者除四十二歲厄難得福德
二月初午會日肇於山城稻荷社今
多觀音亦用之以每年二月初午為
會日群集得土產草餅解去

栗島

三月栗島引

同

栗島太神紀伊國名草郡蚊田蚊田為

明

加田或為海部郡非也祭神一座少

彥名命高皇彥靈尊之子當社鎮座

年記未詳為本朝醫藥之祖

高野山

四月花僧引

同

高野山金剛峯寺在紀伊國伊都郡

嵯峨天皇弘仁七年建立弘法大師開基

即廟窟女人不許入之靈場也

當宗

同

七十五

當宗神社在河內國志貴郡宇多帝

外祖父姓當宗氏宇多天皇仁和四年四

月十四日祭之有奉幣使每四月上酉

日祭禮按宇多天皇光孝帝第三

子母名皇后班子二品式部卿仲舒

親王之女也以為當宗氏者未審如其

祭親王

○有異說

日光

同 六十六

日光山社在下野國河內郡祭神事代
主命開山勝道上人祭礼九月九日勝道
姓若田氏當國芳賀郡人早出鹿粟
鑽仰勝業州有二荒山峯巒峻峙
振古未有陟者稱德帝時神護景雲
元年秋七月勝道始企跋涉路險雪
深不能升止山腹凡經二七日而還今
歲又興先志漸達于頂衆峯環峙四
湖碧深奇花異木殆非人境乃結小菴
於西南隅居數載遂就勝處建伽藍
藍号神宮寺崇權現安丈六千手觀
音像蓋二荒訓布太阿良今云補陀洛以
為觀音之所坐空海登山改日光以
為大日遍照之山而後圓仁居住唱法

華遂為天台叡山座主兼帶為寺
務元和三年祭祀東照神君尊
靈當於當山以來滿山莊嚴其美言
語絕

氣比社

八月敦實祭

同 七十

氣比大明神在越前國敦賀郡祭神
仲哀天皇仲哀帝行幸于角鹿其行
宮号筭比宮神功皇后十三年始祭其
飯神貞觀元年正月神階從一位

疫隅社

六月朔天王祭

同 七十八

疫隅社在備後國鞆浦祭神三座同
于山城祇園祭六月十四日
不二詣 同 六十九

富士山隸駿州而跨于四箇國南西駿州
東北相州北西甲州巽畧跨豆州凡關

東八州望之山形不異唯北面山脚長
南面殊嶮坦也自甲州登曰吉田口自駿
州登曰大宮口自相州登曰蹉走而
其三處各有淺間神社孝靈天皇五年
六月富士山始見蓋江州湖一夜涌出
其土為富士山故于今江州人七日精進
其余人百日照齋而登山每六月上旬
至七月登山其頂上常有煙氣而四
時雪不消唯六月十五日消其夜降
山口社 同 七十九

宇佐八幡宮在豐前國宇佐郡祭神

宇佐八幡宮 同 八十九

祇園同永正年中大内義興勸請之
卜部兼右修之

應神天皇玉依姬神功皇后欽明天
皇三十一年冬訖菱形山民家三歲兒
曰我是響田八幡麻呂也即鎮座
郡家東馬城峯頂聖武天皇神
龜四年造寶殿号廣田八幡太神
宮大自在菩薩号桓武皇帝延
曆元年五月依神託初定元正天皇
養老四年依說宣始行放生會

筑前國 筑前八幡宮在筑前國那珂郡筑前

當國社前西南楹中有標松祭神三座
神功皇后應神天皇武内宿禰仲哀
天皇欲討新羅國與神功皇后同
到筑紫檀日宮催軍旅時仲哀
崩御焉皇后懷妊向臨月然自作男

貌執弓弩斧鉞且挾石於腰咒曰
請征伐以後有降誕而三韓悉討
平歸於筑紫皇子誕生應神天皇
是也其地呼曰宇彌邑胞衣藏箱埋
地植松於上為標其地呼曰箱崎挾
腰之石今在于伊都縣道邊醍醐天皇
延喜二十一年六月二十一日依託宣建
宮於管崎松原又曰千代松原即
管崎松原也南北凡一里東西十町許
皆白砂此邊無双絕景也延喜式為那
珂郡今屬糟屋郡

宰府天神

同日

宰府天神在筑前國太宰府祭神
一座管丞相

橋立白字

同 七十七

殊

天橋立文殊在丹後國與謝郡宮津
西半里許相傳此島神代九世時出來
故名九世戶又名切戶東西長二千二
百二十九丈南北闊九十二丈內自北流南
入海闊百七八十丈可舟渡松林中
有文殊堂向東自海庭出現
閣浮檀金文殊像每月十六日夜半
後從丑寅方海澳出龍火浮焉於
堂北正五九月十六夜則一火天降
謂之天燈又一燈有名伊勢御燈者
堂前有松一株名御燈松

大原社

同日

大原社在丹波國桑田郡祭神一座
伊弉册尊今加祭伊弉諾尊天照太
神為三座

○ 水尾大明神

同日

水尾大明神在丹波國桑田郡祭神一座清和天皇天皇諱惟仁文德帝第四子母勝原明子號深履后良房公之女也九歲即位幼帝為之始二十六歲讓位於太子入當山三十一歲崩葬栗田山號水尾帝

○ 廣峯社

六月廿四日

同日

廣峯社在播磨國飾磨郡廣峯祭神三座素戔嗚尊稻田姬八王子社記云聖武天皇天平五年十八日吉備公歸朝於此地見異神乃素戔嗚尊也遷到京師奏旨奉勅同六年令營社其後圓融院天祿三年自西峯遷于廣峯其後

又貞觀十一年遷于山城京祇園之社是也

○ 人丸

同日

人丸社在播磨國明石郡大倉谷松林中祭神一座材本丸木像長七寸摩所祭年記未分明小笠原右近太輔始築明石城時當社有傍以為鎮守後移于此城内亦有一社按人丸者石見國人仕持統文武兩朝遇新田高市皇子古今獨步歌仙也然爵祿未貴未預政務故系傳不詳乎聖武天皇神龜元年三月十八日卒於石見國蓋三位者恐贈爵矣以曙明赤石浦之詠歌最秀逸後人建祠於明石浦下野宇津宮石見高角山播磨明石以上三處有丸

之神社大和葛下郡枳本村同添上郡
春道森林以上有人丸墓相傳勝原兼
房夢過人磨著烏帽子直衣紅袴
左手持紙右手握筆立梅花下其年
可六十餘既覺使畫工圖其肖像
以珍藏焉獻白川上皇納烏羽寶庫
今世所圖人丸畫像皆據于此

書

同

同拾芥抄

枳本人磨官位不見天智御時人又天智
御宇以後人歟

同

同作者部類

枳本大夫人丸蓋大夫五位以上通稱也又
金玉集序曰正三位枳本人磨

同

同姓氏錄

枳本朝臣人丸天足彥國押人命之後
也依家門有枳樹為枳本氏

春日社

同七十三

春日社在大和國三笠山麓春日鄉祭神
四座第一武甕槌命第二經津主命
第三天津兒屋根命第四姬太神稱
德天皇神護景雲二年十一月常陸
國鹿島武甕槌命下總國香取經
津主命河內國平岡天津兒屋根命
飛來垂跡於三笠山蓋姬太神初祭
于此矣春日祭清和天皇貞觀十一年
十一月九日甲日初行每年二月十一日
申日兩度

春日の宮

同

若宮祭神一說云天津兒屋根命子天

在大和國添
上郡三笠山
麓春日鄉

押雲余也蓋不然焉社家秘說而他
人無知其實御祭崇德天皇保延二
年九月十七日初行之後以化園院寬正
年中初轉日十一月二十七日行之以來用
此日贄鳥獸雉千二百五十六羽兔
百三十四耳狸百四十二匹儀式甚嚴
重又有流鑄馬伶人舞~~舞~~百二十番
相撲十番細男舞田樂曲等
後日能 同日
若宮御祭十一月二十七日翌二十八日猿
樂謂之後日能
水屋能 同日
水屋社其北有水屋川每年四月吾
社前有猿樂謂之水屋能祭神三
座素盞鳥尊稻田姬南海神女

在大和國添上郡
春日
鄉

東大寺

同日

東大寺又名城大寺大華嚴寺恒說華
嚴寺國分寺金光明四天王護國之寺八宗
兼學以三論華嚴為本
二月堂行 同日

二月堂在大和國添上郡東大寺一本名冒
索院實忠和尚開基本尊十一面觀音
秘佛也於攝州難波浦實忠和尚因
瑞現得之長七寸銅佛每二月朔日至
十四日有法會即弘法大師所作靈符俗
云二月堂牛王是也

興福寺

同日

興福寺初名山階寺或云厩坂寺在大和
國添上郡春日大藏冠山州宇治郡小野
鄉山階~~住~~造寺於其地號山階寺後

在大和國添上郡

鄉

新能 同
興福寺
大門前

天武朝白鳳元年所遷和州高市郡
厩坂改號厩坂寺後元明朝和銅三
年又所遷于春日地淡海公造營改
號興福寺勝原氏御願法皇相
宗基本也南大門金剛力士之二王像亦
前有四座新能自二月七日至十四日
維摩會

同日

維摩會於大和國添上郡興福寺講堂
行之大織冠有疾既危時有百濟國
尼法明者曰讀誦維摩經中問疾
品公疾可愈也仍令僧讀之果平
愈其後處々修維摩會延曆
二十一年以來興福外不可勤有勅
定凡維摩會講師用聖寶僧正
所持如意勤之如自東大寺不出其

如意則不成

般若寺

同日

般若寺在大和國奈良之北開山觀
賢僧正本尊丈六文殊治養四
年平重衡燒之初真言宗也龜山
院文永年中興正菩薩再興以來
為律宗永祿十年正親町院時松永
彈正與三好合戰時兵火回祿寬文
年中寺院再興

卒川社

同日

卒川社在大和國添上郡今子守町
祭神三座開化天皇子守神住吉神
其祭曰三枝祭

勤天王

同 七十八

疫隅社在備後國沼隅郡鞆浦祭神

三座同于山城祇園祭六月十四日

西大寺

同 七十三

西大寺在大和國添下郡小和田村之北稱
德帝天平神護元年草創開山常
騰僧都

當麻寺

同日

當麻寺在大和國葛下郡二上山南東
麓號二上山法藏院禪林寺真言寺
淨土寺兩持推古天皇二十年河州交
野郡山田鄉所建乃法藏院也天武天
皇白鳳二年麻魯古親王得瑞夢
感遺麻魯古及刑部親王末地
於役小涌用河州法藏院移營之
同十四年寺院成就改號禪林寺而
後麻魯古之孫當麻國見真人改號

當麻寺也四月十四日迎講法事俗云

迪供養惠心僧都於叡山始行之
後遷于此為每年法事

三輪大明神

同日

三輪大明神在大和國城上郡三
輪山又名三諸山祭神一座大日貴
尊一名大國主神又名大物主神唯
有一鳥居二鳥居樓門拜殿等而
無神殿里人誦造營之時群群鴉
啄破且不知餘木所在知神不好社
祭禮四月十二月上卯日如三卯則用
中卯

狹井社

花鏡引

同日

狹井神社在大和國城上郡三輪社
二町北今無社祠祭神二座大日貴荒

魂世所謂花鎮之神是也疫神而
花散之時疾神分散為病故有鎮
花祭宇多天皇寬平九年三月七
日始マツラヒ

布留社ハク 留社ル 俗名ハク 留社ル

石上布留社在大和國山邊郡布留鄉
祭神布都御魂神寶藏有方五尺
櫃固有封印不開伊香色雄命奉
祀瑞寶此乃十握劍也一云神代十種
瑞寶也精和天皇貞觀九年加正位
初從一位勳六等相傳昔自布留川
上一釵流來所觸石木皆見切破然
有洗布女而劍纏布留取收所祭
故號布留明神每六月晦日祭祀
奉出劍於鳥居外又七月七日修護

摩マ自寶藏マ及マ負出而衆僧有
行法謂之笈渡永久寺龍福寺僧
及氏人等百人執行之

日吉ヒコ 日吉ヒコ 國クニ 志シ 賀カ 郡クニ 坂サカ 本ホ 村ムラ

祭神二十一社比叡山鎮宇上七社大宮

大オホ 貴キ 二ニ 宮ミヤ 國クニ 常トコ 立タテ 尊ミ 神カミ 皇ミコ 產ウツ 靈マタ 尊ミ 聖ホコ 眞マコ 子コ 勝カチ 尊ミ 八ヤチ

王子オウジ 國クニ 狹サカ 穗ホ 尊ミ 客キヤク 人ヒト 宮ミヤ 伊イ 禰ネ 十ジュウ 禪ゼン 師シ 瑠ル 尊ミ 三サン

宮ミヤ 惟タカ 根ネ 中ナカ 七シチ 社シャ 下シモ 八ヤチ 王子オウジ 天アメ 御ミ 中ナカ 王オウ 子コ 宮ミヤ

建タテ 御ミ 名ナ 早ハヤ 尾ビ 鳥トリ 尊ミ 大オホ 行ユキ 事コト 高タカ 皇ミコ 產ウツ 靈マタ 尊ミ 聖ホコ

女メ 下シモ 照テ 牛ウシ 之ノ 尊ミ 授タテマツ 氣キ 比ヒ 宮ミヤ 仲ナカ 哀アハレ 下シモ 七シチ 社シャ

小コ 禪ゼン 師シ 彦ヒコ 火ヒ 々々 惡アク 王オウ 子コ 地チ 愛アイ 染シメ 本ホ 新ニホ

行ユキ 事コト 瀨セ 津ツ 岩イワ 瀧タリ 命ノミ 山ヤマ 未ミ 詳ササ 記キ 劍ケン

宮ミヤ 之ノ 變マタ 神カミ 大オホ 宮ミヤ 竈カマド 殿テン 澳アウ 津ツ 命ノミ 天アメ 智チ 天アメ 皇ミコ

御ミコト 宇ウ 裕ユク 鎮チン 座ザ 桓クニ 武タケ 天アメ 皇ミコ 延ノボリ 曆リキ 十ジュウ 年ネン 始ハジメ

出神輿行祭礼釋行圓有示現以後
稱山王以猿為宮社傍養之

關明神

同日

關明神在近江國志賀郡相坂祭神
蟬丸之靈蟬丸姓氏未詳式部卿敦實
親王宇多帝雜色也精管絃特善
琵琶自愛流泉啄木曲不敢傳之人
獨蟬丸自得而退結菴於處々幽栖
矣後住相坂關邊丐食於往來人
而時々絃歌樂焉平素所弄之琵琶
號無名蟬丸頭童而形類僧時人稱
為道人或為仙又善和歌俗說蟬
丸延喜帝第四子而盲者甚非也

築摩明神

同日

築摩明神在近江國坂田郡祭神

御食津神祭四月朔日筑摩庄大膳職
御厨之地也運送載延喜式等故祭
御食津神欵蓋此神依掌稻食而里
女為嫁則祭祀必載鍋釜奉之神
矣如再嫁者二枚三嫁者三枚被之祭
日候神幸之後

彦根神

社

五月室

同日

彦根神社在近江國蒲生郡彦根祭

神活津彦根命

素盞鳥
尊之子

三井寺

同日

長等山園城寺一名三井寺在近江
國大津金堂彌勒佛長一寸八分講堂
經堂尊氏將軍納一切經二王運慶
作鐘樓俵藤太所得於龍宮之鐘
也園大智天皇初移崇福寺於此

其後大友與多磨奏天武天皇復創
當寺智證大師天安二年歸朝依
新羅明神告到當寺受大友都堵
磨之讓經奏造唐坊納唐國傳來
經書嘗有老僧教待者時年百
六十二師問曰此寺號御井者何耶
教待答曰寺西有岩井天智天武
持統三代天子降誕時汲此井水為
產湯故號御井或為三井師曰此
地似唐青龍寺既後曰園城寺

○子園子

同

護法明神在近江國大津園城寺
稱千團子乃比丘之像也祭四月十日

○石山象

同

石山寺近江國勢多之南本尊如意

輪觀音開基良辨和尚天平勝寶
六年草創

○熱田

同

熱田大明神在尾張國愛智郡熱田
祭神草薙劍藏土用御殿別有
五座中央日本武尊西天照大神素
盞雄尊東宮尊賀媛建稻種命
神衣象

同

內宮在伊勢國度會郡宇治祭神
天照皇太神相殿左天牟力雄尊命
右萬禰豐秋津姬命神武天皇造帝
宅於檀原時以來天照太神鎮座于
內裏至崇神天皇六年良長同原
和洲笠之縫里立神籬皇女豐鋤入
姬命護之其後倭姬命相代勤之

○使

任神勅遷幸諸國處之凡十四度
垂仁天皇二十六年冬十月甲子鎮
座以來為不易宮所神衣會
祭四月十四日九月十四日

月次祭 同日

月次祭六月十二月有之外宮十六日
內宮十七日

年祈年祭 二月同日

天武天皇白鳳四年始行之

外宮 同日

外宮在伊勢國度會郡沿木郷山
田原祭神豐受皇太神天地開
闢之始祖國常立尊是也相殿左
天津彦火瓊杵尊右天兒屋根
命天太玉命

○至明年齋
于此九月上
旬吉日臨河
祓禊

○齋王殿行 同日

凡天皇即位則卜定可立齋宮皇

女改宮城内作初齋院至明年七

月齋於此更城外造野宮八月

移入野宮參入於伊勢齋宮其臨

行日參內裏時天皇自手以小櫛

插其額俗稱之別御櫛祓禊事

畢而下向伊勢謂之郡行

住吉社 同 七十四

住吉大明神在攝津國住吉郡住吉祭

神四座底筒男中筒男表筒男神功

皇后

生玉社 同日

生玉社在攝津國大坂所屋巽祭神

天生玉神神武天皇到難波碁日

祠此神。織田信長兵火社宇皆回祿。天正十二年秀吉公築城時遷此地。慶長年中造營之伽藍樓門山魏慶長之兵火燒失後寺社繼之寶永年中別當法印眞賢再興。

土塔乞

同日

土塔塚社在攝津國東生郡荒陵山四天王寺南門外三四町南每四月十五日土塔會殿近年祭礼甚簡易也

今宮係

同日

今宮惠比須在攝津國西生郡今宮村祭神蛭兒宮天照大神素盞烏尊天王寺鎮守對西宮稱今宮乎然其來尚矣正月十日謂十日戎商人專群集

同九月

同日

今宮惠比須在攝津國西生郡今宮村祭神蛭兒宮天照大神素盞烏尊

九月十八日祭此日遷幸神輿於天王寺西門前直還幸而有流鏑馬

座摩係

同日

座摩社在攝津國西生郡渡邊祭神神功皇后六月廿二日祭礼神輿供奉嚴重

天滿係

同日

天滿天神宮在攝津國西生郡天神橋筋東入所祭神菅相公村上天皇天曆年中奉詔勸請之社記未考祭礼九月二十五日有流鏑馬

同係

同日

天滿天神在攝津國西生郡天神橋筋東入所祭神菅相公村上天皇天曆年中奉詔勸請之社記未考上月二十五日神輿出天戎島之御旅所行還川舟數万挑灯群集遊舩亦無比類

長陽寺

同日

崑崙山昆陽寺在攝津國川邊郡昆陽庄開基行基畿內四十九所之其一也藥師觀音及梵釋二天像自作之大伽藍天正年中爲兵火回祿如今寺院纔存耳

西宮蛭兒

同日

西宮在武庫郡西宮町之西祭神三座天照大神素盞烏尊蛭兒尊相殿

左大己貴尊有事八十神祭正月十日村民自九日朝至夜閉戶不出入謂之居籠亦一異也

大黒天

同日

天神佛也如摩利支天而兵家者流崇之祈軍利浮屠信之乞供養民家常敬之祈幸福

切利云々

同日

摩耶山切利天上寺一名佛母山在攝津國免原郡大坂之西八里天武天皇時天竺法道仙人來朝建之法道將赴日本先到中華謁西明寺道宣律師師以十一面觀音與之曰釋迦四十二歲時鑄之登切利天遇摩耶

夫人授之至佛滅後摩耶夫人降
于下界附與此像於阿那律尊者
其後有毛首毛頭此像及佛舍
利經論等于當寺有之今寄于
汝是以宜利日東衆生也法道舊
之新作一尺六寸木像納之匱中
以為當寺本尊而伽藍坊舍
三百餘為攝州第一名利後
有興廢今纔存七八箇寺院
耳

吳織糸

同同

吳織社在攝津國豐島郡池田町
南社綾織社在右同處北社應心
神天皇朝自百濟國裁縫織紡績
等女工來又自吳國來者稱吳織

綾織蓋祭其靈宇當所來由
未考

箕面富

同

箕面山瀧安寺在攝津國豐島郡其
面開基役小角到當山瀑布夢
謁龍樹菩薩而後建寺號箕面
寺以爲龍樹淨刹又爲辨才
天及歡喜天之靈地每正月七日於
辨才天堂數万小木札書各姓名納
櫃修法讀經畢以錐突取於櫃孔
中之者必得福第二第三亦然謂之
富札

フウケ

名物六帖

漆又云葉取又罩又魚梅又罩笠



○
管

管又云筍ウケ

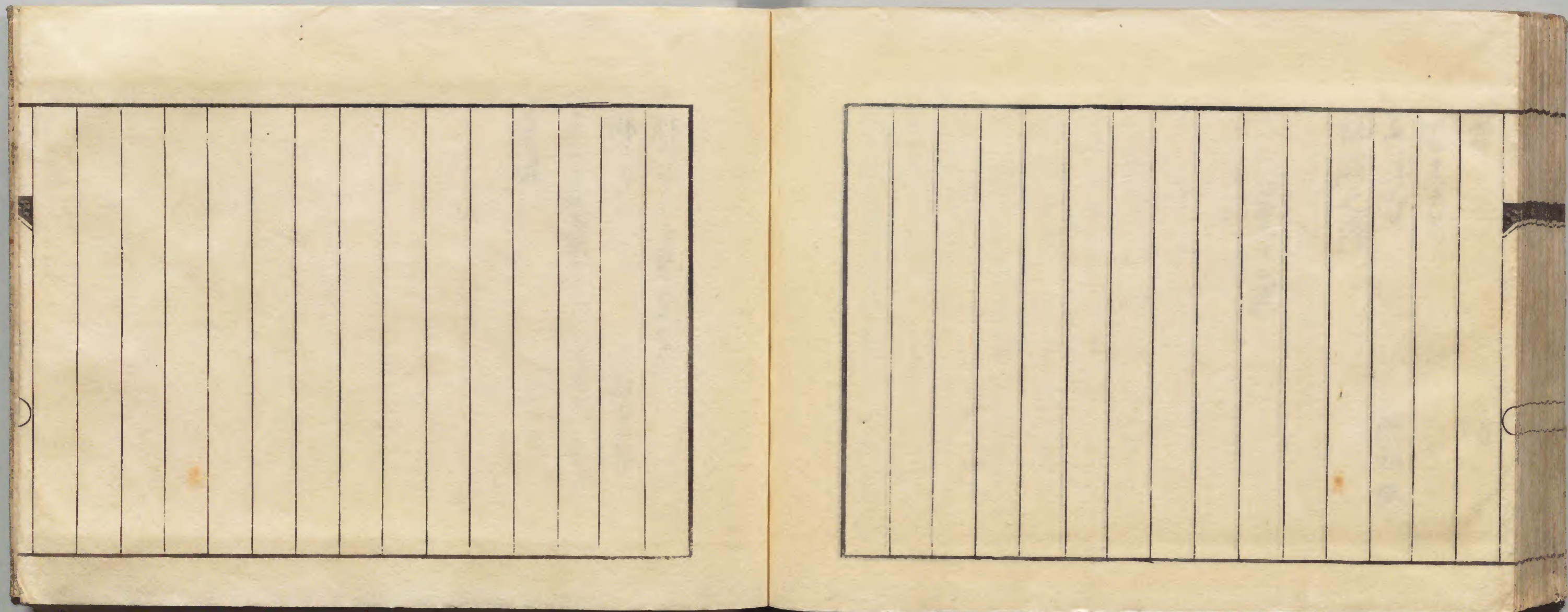
ふしウケ

○
管謂之ウケ管

四百六十二說

雨雅

○



まき

増山の井

まき 四月の香あり 夏の次あり

柳のたう

増山の井

柳のたう 三月の香あり

